

平成25年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学FD委員会

はじめに

—マイクロ・レベル FD の組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント (FD) をマイクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。FD を三層に分けて考察することの意義とその具体的な内容については、これまでも FD 研修会等で折にふれてお伝えしてきましたが、2009 年に学士教育課程と大学院教育課程における FD が義務化され、今年で 6 年目を迎えることから、改めて FD 三層論について確認し、今後の FD 活動の発展につなげたいと思います。⁽¹⁾

マイクロ・レベルの FD の目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学で FD の名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学 FD 委員会が中心になって行う FD 活動はマイクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらもミドル・レベルと同様に、そのための具体的な FD 研修会が開催されるわけではありません。現行の学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業が FD 活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルの FD 活動は、その性格上、全学的な視点と学部的な視点が要求されますが、マイクロ・レベルの FD は、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや研修会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。しかし、2007 年以降、本学では、複数の学部で、また学士課程教育センターが中心となって積極的に授業改善に取り組んでいます。その具体的な試みがピアレビューであり、センター主催の授業方法改善のためのワークショップの実施です。

今後も引き続き、マイクロ・レベルの FD を教員のキャリアパスの問題と連動させ、助教、准教授、教授、それぞれの職位に応じて設定されたフェーズ目標への到達をめざすことで、個々の教員がファカルティの一員として有機的に FD にかかわれる体制を堅持していきたいと考えています。⁽²⁾

※(1) 2007 年に大学院設置基準が見直され、また、2008 年に大学設置基準が見直されたことにより、2009 年度から学士教育課程と大学院教育課程において FD の実施が義務化されました。

※(2) 職位と連動した各フェーズの目標：わかる→実践できる→開発できる→教えられる

目 次

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画および課題	1
(4) 活動状況	2
(5) 活動の成果	4
(6) 今後に向けて	4
2. 学部の活動.....	5
3. 教師教育リサーチセンターの活動.....	48

II 教員研修

新任教員研修会

(1) 研修プログラム内容	51
(2) 配付資料・参考資料	52
(3) 実施の成果	54

III コア科目およびユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要	57
2. 集計結果及び公表	57

参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事内容	80
2. 「授業評価アンケート」用紙.....	82
3. 玉川大学 FD 委員会規程.....	84

※本文中の記載内容について

- ・本文中の文字表記については、原文のままとした。
- ・役職名称は、平成 25 年度当時の記載とした。

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

(2) 委員構成

委員等	所 属	氏 名
委員 長	教学部長	菊 池 重 雄
副委員長	学士課程教育センター長	大 藤 正
委 員	FDer	小 島 佐 恵 子
委 員	文 学 部	山 口 修 二
委 員	農 学 部	宮 田 徹
委 員	工 学 部	小 倉 研 治
委 員	経 営 学 部	伊 藤 良 二
委 員	教 育 学 部	大 谷 千 恵
委 員	芸 術 学 部	辻 裕 久
委 員	リベラルアーツ学部	中 村 聡
委 員	観 光 学 部	小 林 直 樹
委 員	通 信 教 育 部	松 山 巖
事務担当	学士課程教育センター	山 崎 千 鶴
事務担当	教師教育リサーチセンター	高 橋 正 彦
事務担当	教 学 部 教 務 課	中 村 好 雄
事務担当	教育企画部教育企画課	大 野 太 郎
事務担当	人事部研修センター	伊 従 記 章

(3) 今年度の活動計画および課題

昨年度に引き続き、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2013 に沿って取り組んだ。すなわち、

1. 各分野の学問分野に応じた教授法の研究開発の開始

- 1) 学外で開催される各種研究会等への参加
- 2) 学内における必要性に即した多様な研修会の開催
- 3) 教員が参加しやすいピア・レビューの検討
2. 双方向型授業、問題解決型授業（PBL）の研究会発足
 - 1) 本学で実施されている取組の事例報告会等学内 FD 研修会の開催
 - 2) 本学における PBL 授業の具体的な検討
3. 全授業科目の成績評価分布を公表する
 - 1) ルーブリックに関する学内研修会等の開催
 - 2) 他大学の取り組み事例の調査
4. FDer の養成プログラムの作成と実施
 - 1) 「FD フォーラム」、「大学教育研究フォーラム」等、関連研究会等参加
 - 2) FDer 候補者の選定およびプログラム検討
5. 玉川大学教職員 Credo の草稿の作成
 - 1) Credo に関する他大学の取組事例の継続調査

(4) 活動状況

<平成 25 年度>

5 月 10 日	第 1 回大学 FD 委員会 開催
5 月 27 日	日本私立大学協会附置私学高等教育研究会主催公開研究会「諸外国における質保証の動向（米国・英国・欧州）」職員派遣
6 月 1 日・2 日	大学教育学会年次大会（宮城県 東北大学）職員派遣
6 月 18 日	地域科学研究会高等教育情報センター主催研究会「“学力担保としての検定試験活用策／英語編」教職員派遣
6 月 28 日	朝日新聞社主催高等教育シンポジウム「大学での学びを問い直す - 主体的な学びを培う大学教育とは -」職員派遣
6 月 29 日	Benesse主催大学シンポジウム2013「学生が成長する教学改革 - 実現までのプロセス、その成果と課題 -」職員派遣
7 月 12 日	第 2 回大学 FD 委員会 開催
7 月 15 日	国立教育政策研究所科学研究費助成事業高等教育開発東京国際シンポジウム「高等教育開発の世界的潮流 - 未来そして挑戦」職員派遣
7 月 20 日	上智大学・岩波書店主催上智大学創立 100 周年・岩波書店創業 100 周年記念シンポジウム「グローバル時代における日本の大学を考える」職員派遣
7 月 31 日	国際ビジネスコミュニケーション協会主催 IIBC セミナー「大学における国際競争力のある人材の育成」職員派遣
8 月 8 日	大学入試センター研究開発部主催 2013 大学入試センター研究開発部シンポジウム「入試研究から見た高大接続 - 多様化する大学入試にせまる -」職員派遣

10月7日	Benesse 主催大学シンポジウム 2013「学生が大学の授業で身につけるべき力とは - 初年次教育における思考力育成の勧め -」職員派遣
10月10日	京都大学高等教育研究開発推進センター主催第 86 回京都大学高等教育研究開発推進センター公開研究会「Learnig Assessment and Technology to Enhance Deep Active-Learning」教員派遣
10月25日	「高等教育機関における障害学生支援に関する全国協議会（仮称）」呼びかけ人会主催「高等教育機関における障害学生支援に関する全国協議会（仮称）」設立準備大会 職員派遣
11月7日	北里大学主催第 10 回北里大学高等教育開発センター講演会「My Teaching をどのようにデザインし改善するか - 授業評価の有効な活用方法とは -」教員派遣
11月13日	学園 FD 研修会「玉川学園のグローバル化を考える」開催
11月22日	第 3 回大学 FD 委員会 開催
11月28日	Future Skills Project 研究会主催産学協同就業力育成シンポジウム 2013「主体性が学生を変える、学生が社会を変える～広がる学生の本気を引き出す Future Skills Project の挑戦～」職員派遣
11月30日 ・12月1日	大学教育学会課題研究集会（京都府 同志社大学）教員派遣
12月7日	法政大学教育開発支援機構 FD 推進センター主催法政大学第 9 回 FD フォーラム「わかりやすい FD について考える」職員派遣
12月9日	国立教育政策研究所科学研究費助成事業平成 25 年度教育改革国際シンポジウム「TUNING-AHELO 学位プログラムの体系化に向けて」職員派遣
12月10日	国立教育政策研究所科学研究費助成事業平成 25 年度教育改革国際シンポジウム「TUNING-AHELO コンピテンス枠組の水準規定によるグローバル質保証」教員派遣
12月17日	科目担当者研修会「アクティブ・ラーニングの指導法 - ジグソー法を用いた授業の展開」開催
1月17日	第 3 回大学 FD 委員会 開催
2月13日	科目担当者研修会「シラバスの効果的な書き方の検討」開催
2月22日・23日	大学コンソーシアム京都「第 19 回 FD フォーラム」教職員派遣
2月24日	玉川大学「FD・SD」研修開催
3月5日・6日	大学 FD 委員会主催 「平成 26 年度新任教員研修会」 開催
3月12日	東京大学教育研究データ分析室主催教育研究データ分析室シンポジウム「データから見た教養教育」および東京大学教養教育高度化機構主催教養教育高度化機構シンポジウム「初年次教育」 職員派遣
3月18日・19日	京都大学高等教育研究開発推進センター「第 20 回大学教育研究フォーラム」教職員派遣

3月20日	第4回大学FD委員会 開催
3月24日	ELFプログラム担当者オリエンテーションミーティング 開催
3月26日	「一年次セミナー」新規担当者研修会 開催

「大学FD・SD」（2月24日開催）においては、千葉大学の竹内比呂也先生（教授・附属図書館長・アカデミックリンクセンター長）より「ラーニング・コモンズの意義と役割」としてご講演があった。現在建設中の大学教育棟 2014 3 階に開設されるラーニング・コモンズについて、その意義と活用についてわかりやすいお話をいただいた。また、午後には本学の教員を講師にアクティブ・ラーニングの分科会を10のセッションに分かれて開催した。

また、秋学期においては大学授業の授業参観を実施し、広く学園教職員が参加した。

授業評価アンケートは春学期・秋学期ともに実施した。ただし、コア科目については春学期に言語表現科目群および社会科学科目群、また秋学期には自然科学科目群および総合科目群の開講科目を対象に実施した。さらに、今年度より開設されたユニバーシティ・スタンダード（US）科目については、一部を除き、実施した。なお、実験実習実技科目は除くことは例年のとおりである。

（5）活動の成果

今年度より FDer 認定教員に専任としておいでいただくことができ、FDの一層の検討が進んだ。

今年度の活動計画に基づき、活発な取組をすることができた。とくに、他機関が開催する関連研修会等には教員のみならず職員も多く参加し、教職協働を実現すると同時に、教員と職員が同じスタンスに立ってFD活動を推進することができた。

また、前項のとおり、学内においても各種研修会等を開催した。今年度は大学教育棟2014の完成後を見据えた改革に向けた整備、土壌づくりを目的とするところが大きかったが、一定の理解は得られたものと考えている。

ただし、授業参観については、広い範囲への公開が定着してきているものの、一方で、参観者がいない科目もあった。また、通常の授業時間内で行なっているため、大学教員が参観しにくい状況があることもわかった。

（6）今後に向けて

次年度においても、他機関主催の関連研究会等には積極的に参加し、関係教職員への情報提供を行いたい。また、学内で開催する研修会等についても多様な内容のものを開催していきたい。とくに、次年度においては授業方法・技法の研修会やワークショップを開催する予定である。アクティブ・ラーニングに関する研修会等はもとより、PBL（Program Based Learning）やルーブリックについての研修会等を実施したい。

また、FDerの養成については、FDer認定教員を中心に養成プログラムを作成、実施を進めていきたい。

詳細については、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2014 に沿って進めていく。

2. 学部の活動

平成 25 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価アンケートの実施			学部研修会
			実施時期	専任 対象	公表	
文学部	7 名	2 回	春SEM終了後 秋SEM終了後*1	全員	学内外 (Web)*2	学内外実施
農学部	7 名	2 回	春SEM終了後 秋SEM終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施
工学部	5 名	2 回	春SEM終了後 秋SEM終了後	全員	学内外 (Web)*3	学内実施
経営学部	6 名	5 回	春SEM終了後 秋SEM終了後	全員	—	学内実施
教育学部 (通信教育 部含)	8 名	4 回	春SEM終了後 秋SEM終了後	全員	学内	学内実施
芸術学部	6 名	7 回	春SEM終了後 秋SEM終了後	全員	学内	学内実施
リハビリアーツ 学部	6 名	2 回	秋SEM終了後	全員	—	学外実施
観光学部	5 名	2 回	春SEM終了後 秋SEM終了後	全員	学内	学内実施

*1: 対象全科目を春セメスター (春SEM)、秋セメスター (秋SEM) いずれかで 1 回実施 (重複実施はせず)。

*2: 文学部における学生によるアンケート結果の公表は、比較文化学科のみ実施している。

*3: 学外には総括した内容を Web で、学内には全てを詳細に、報告書冊子で公表している。

※コア科目およびユニバーシティ・スタンダード科目についての学生によるアンケートは別途実施している。

§ 文学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

基本的な理念はこれまでと変わらない。

社会の大学に対する期待とニーズの多様化と、大学生の学力低下という現実を受け、大学教育はそれに対応すべく、役割意識と方法論の変革を余儀なくされている。また不況下での就職難に対応するため、学生の意識付けと就職指導も、大学にとって重要性を増している。かかる現状認識の下、文学部では、一人ひとりの教員が文学部の理念や教育目標の実現に向けて意識を高め、職能成長できるような FD 活動を心がけている。そして、一部の教員のみが FD 活動を担うのではなく、全員が主体的に FD 活動に参加し、組織的な FD 活動を実現できるような体制を構築することを目標にしている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部長および主任会（教務主任、学生主任、人間学科主任、比較文化学科主任）のもとに、文学部 FD 委員と人間・比較文化両学科の FD 担当（人間学科は FD 委員が兼務）で、文学部 FD 委員会を組織している。

この FD 委員会は、年に 2 回の FD 委員会を招集する他、各学科の学科会あるいは運営委員会等においても定例的に FD 活動の企画・運営に関する事項の審議を行っている。

3 平成 25 年度の活動内容

(1) 授業設計・成績評価ミーティング（人間学科）

① 概要（目的を含む）

複数教員が授業担当をする諸科目について、とりまとめ役を座長として授業の計画・内容・成績評価に関する合意形成を目的としたミーティングを行なう。

② 到達目標

各科目の授業担当者間において科目の教育目標達成のための合意形成を得ること。

③ 活動内容

授業経験の報告と意見交換、授業改善の提案、成績評価に関する検討、他科目との連携の可能性、教員による授業評価

・「人間学総合セミナー」

平成 25 年度の「人間学総合セミナー」は、平成 24 年度と同様、キャリア形成のあり方をテーマに町田市と連携して準備を進め、PBL（Project Based Learning）を実施した。

キャリア形成のための社会人基礎力がどのくらいついたかに関し、平成 25 年度は平成 24 年度に比べ社会人基礎力をより詳細に調査した。その結果、チームリーダーの特徴によって獲得できた力の自己評価が異なっていた。チーム・メンバーの力を引き出すことに成功したリーダーの下では、「前に踏み出す力」「チームで働く力」「考え抜く力」をすべて等しく獲得でき、中心となり自らが課題解決を行ったリーダーグループでは、「チームで働く力」を獲得でき、強いリーダー・シップを発揮したリーダーの下では「考え抜く力：創造力」と「チームで働く力：傾聴力」を獲得

できた」と自己評価している。このグループ毎に獲得できた力の相違は、チームリーダーの個性から生じたものと考えられる。平成 25 年度の PBL 型の授業において、チームリーダーの養成も重要な課題であることが示唆された。

・「人間学演習」

各演習において設定したテーマや、担当教員の専門分野に応じて、それぞれの内容、方法により授業を進めた。また、演習の一環として、ゼミ研修旅行や3年生対象のキャリアセミナーなども実施した。授業の進め方や行事の実施方法、あるいは成績評価のあり方などに関する授業担当者による意見交換は、必要に応じて学科会で実施した。これらのことにより、受講生は人間学的研究を深めるとともに、生涯学習やキャリア計画にとって基盤となる機会をもつことができたと考えられる。

・「人間学基礎ゼミ」および「人間学基礎演習」

5名の担当者により、授業の計画、評価について話し合いを行なった。授業終了後、授業評価を行った。

・「名著講読」

5名の担当者により、授業の計画、評価について話し合いを行なった。授業終了後、授業評価を行った。またコスモス祭を利用して科目紹介展示を計画し実施した。

・「一年次セミナー101」および「一年次セミナー102」

5名の担当者により、授業の計画、評価について話し合いを行なった。授業終了後、授業評価を行った。

④ 評価

上記授業において、授業展開のための合意形成と、今後に向けての指針、さらに学生による授業評価の点において、掲げた目標は100%達成できた。

(2) 授業評価アンケート（比較文化学科）

① 概要（目的を含む）

比較文化学科専門科目群全科目について、授業評価アンケートを実施した。個々の教員が、担当する授業を点検し、改善するための指標を得ることが目的である。

② 到達目標

教員の意図と学生の受け止め方の間にどのような差があるかを検証し、次の学期あるいは次の年度の授業改善に具体的に生かす。

③ 活動内容

実施時期：今年度は春秋両 Semester に開講している科目は春 Semester 末に、秋のみの科目は秋 Semester 末に実施した。

対象科目：比較文化学科の全科目（ゼミと教職関連を除く）

集計：対象となる全 87 科目中 82 科目を回収、有効回答数は 2,984 であった。

集計はクラス別、科目グループ別、科目群別、全体の 4 レベルで行った。

フィードバック：結果は大学ホームページ上で公開すると共に、各教員には、授業改善に資するため、授業ごとの集計結果を返却する。

④ 評価

予定通り実施した。ホームページへの掲載は4月以降になる。

(3) 学外セミナー等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

他大学での FD 活動の取り組み方法やその成果についての情報を収集し、文学部の FD 活動活かすため、学外で開催されるセミナーに教員を派遣する。

② 到達目標

文学部専任教員の 20%を何らかの学外 FD 研修会に派遣する。

③ 活動内容

1. 大学コンソーシアム京都主催 第 19 回 FD フォーラム

開催日：平成 26 年 2 月 22 日～23 日

派遣：6 名（人間学科教員 3 名、比較文化学科教員 3 名）

2. 京都大学高等教育研究推進センター主催 第 20 回大学教育研究フォーラム

開催日：平成 26 年 3 月 18 日～19 日

派遣：4 名（人間学科教員 4 名）

④ 評価

参加 10 名は学部専任教員の 31%であり、数値目標は達成した。

(4) 授業参観

① 概要（目的を含む）

文学部教員の授業力向上のため、授業参観を実施。授業を公開する教員は、参観者からの意見を聞くことによって改善に役立て、参観した教員は、他の教員の授業運営の方法を参考に自分の授業改善に結びつける。

② 到達目標

参観を通して授業実施者と参観者のそれぞれが自らの長短所を自覚し、授業力の向上の方法論的手がかりを得る。

③ 活動内容

実施時期：秋学期

実施内容：人間学科「人間学総合セミナー」

文学部教員 1 名、職員 1 名、学外（三菱東京 UFJ 銀行と博報堂）2 名

人間学科「人間学特殊講義 B」

教員 2 名参観

比較文化学科「地域文化研究入門 B」

職員 1 名参観

④ 評価

今年度は参観後にフィードバックが得られるようになり、単に見て終わりではなく、参観結果についてのある程度のコミュニケーションが図れるようになったことは進歩である。

ただ、参観者の少なさは相変わらず課題としてある。特に教員は、同じ時間に授業を持っているなど、参観したくてもできないケースも多いが、広報の仕方にも検討の必要がある。

4 昨年度（平成 24 年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度の実施計画に載せた目標は、一通りすべて達成することができた。

特に、昨年度予定された、カリキュラム変更に伴う FD レベルでの対応として、文学部 FD 委員会において、各学科の教員による授業改善の現状について長時間にわたる議論を行い、特にブラックボードの活用によって学生の授業外学習をサポートする方法について意見交換を行ったことを特記しておきたい。

5 今後（平成 26 年度以降）の予定・課題について

来年度以降の予定は、まずはこれまで継続してきた活動を続けていくことが基本である。それぞれの活動を、より有効的により有意義にするための努力、すなわちより地に足のついた FD を目指すことが必要だと思われる。

来年度は本学で実施しているキャップ制（各セメスター上限 16 単位）（以下、16 単位キャップ制）も 2 年目を迎え、FD の課題の所在がさらに明らかになると思われる。16 単位キャップ制に伴う FD の担うべき問題を共有した上で、対応策を講じることをもって、来年度の課題としたい。

§ 農学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を実現し、さらなる向上を達成するため、大学 FD 委員会と協調しつつ、全ての教員に各種研修会に積極的な参加を促し、教員相互の授業参観を推進する。また、専任教員および非常勤講師は学生による授業評価を実施する。学部内では、主任会の構成メンバーを中心に各教員との情報交換に努める。これらを通して、教員は自らの資質向上に対する意識をさらに高め、農学部として社会に貢献できる卒業生を育成するために組織的な FD 活動を推進する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生物資源学科主任、生物環境システム学科主任、生命化学科主任、学生主任、教務主任、および大学 FD 委員の計 7 名が中心となり、目標達成にあたる。

3 平成 25 年度の活動内容

(1) 研修会

① 概要（目的を含む）

学部内での研修会は 1)「液体窒素利用および安全講習会」、2)「農学部ハラスメント防止研修会」3)「農学部心に不安を抱える学生指導研修会」4)「高校『生物』の新課程を理解する研修会」、さらに 5)「高校『化学』の新課程を理解する研修会」を実施した。1)については、実験・実習において液体窒素を扱うすべての教員を、2)、3)については農学部全教員を、4)、5)についてはそれぞれの科目の入試作問に関わる全ての教員を対象として実施した。それぞれ実験・実習の円滑な推進、大学生活における学生の適切な支援、入試問題の適正な作成に活用することを目的とした。

② 到達目標

1)については、窒素ガスを用いた操作で正しい指導による事故の防止、2)については教職員間、または教員と学生間のハラスメントの防止、3)については発達障害や学習障害を抱える学生の理解と対応、4)、5)については平成 27 年度受験生に対する適正な試験問題を作成することを到達目標とした。

③ 活動内容

1)は、窒素の取り扱いおよび未然の事故防止について実務的な解説を行い、現場でのより具体的な操作、処置について講習を受けた。2)についてはセクシャルハラスメント、アカデミックハラスメント、パワーハラスメントの具体例と加害者、被害者にならないための心得と対応の講義を受けた。3)は支える人と支えられる人の関係を、物理構造と役割構造から眺め、学生とその家族、教職員やその他医師などがそれぞれの立場でいかに関わるかの講義を受けた。4)、5)は新課程の「生物」および「化学」で生徒が実際に受験してくるにあたり、それぞれの科目の改訂内容について聞き、作問における注意点の講習を受けた。

④ 評価

1)については、実験・実習中の不用意な事故防止に極めて有効な結果を得た。2)については、教職員間での仕事上の適切な接し方、また学生指導における留意点について理解できた。3)では心に不安を抱え、大学生活に支障がある学生の対応について、構造理解と進め方の方策が得られた。4)、5)については、新課程の教育を受けた受験生に対する試験問題作成が、作問を担当する教員にとって適正におこなえる指針を得た。

(2) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部科目担当の全教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、今年度より実験・実習科目を含めて受講生 10 名以上の科目に対し、授業評価アンケートを実施した。

② 到達目標

現状の状況把握により講義技法や情報伝達の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学 HP 上に公開することで受験生および関係者に対し、大学の授業の健全性をアピールする。

③ 活動内容

春semester82 クラス、4,849 名、秋semester60 クラス、3,384 名に対して授業評価アンケートを実施した。

アンケート集計後、結果を各教員に送付した。さらに、大学 HP に学部、学科単位での集計結果を公開した。また、アンケートの自由記述欄を活用するために原本を各担当教員へ返却した。

④ 評価

アンケート結果は概ね良好な傾向を示したが、学科間、または、授業間で、各項目に若干の変動がみられ、授業改善の一定の方向性を各担当教員に示すことが達成されたと思われる。また、大学 HP で公開するにあたり、今後は農学部 HP とリンクし、結果公表に対する内外からの反響の有無とその内容を確認する。自由記述欄については、全体として自由記述が少なく、活用を十分なしているとは言えない。

また、授業評価アンケートの改訂検討を行った。大学として単位の実質化を目指し 16 単位キャップ制などの制度を導入してカリキュラム改訂を行っており、それに即したものである。特に農学部としては実験・実習科目がカリキュラムの中に多くあり、教育上重要視している。授業の性質上、講義科目とはアンケート内容がそぐわないため、実験・実習に対してのアンケート項目を導入する。また、記述欄を多様化し、記入する時間を設けるなどすることで、記述欄の授業改善への活用を高めたい。

表. 平成 25 年度の授業評価アンケート集計結果 (3 学科のアンケート実施科目すべて)
(春学期)

分野	設 問	平均値	強くそう思	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう思	無効 回答数	
			う	思う	言えない	思わない	わない		
			5	4	3	2	1		
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	22.0%	45.0%	26.9%	5.2%	0.8%	12	
	2 授業以外によく予習復習した	3.4	12.5%	31.1%	39.9%	13.2%	3.4%	15	
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	33.7%	42.9%	19.3%	2.9%	1.2%	9	
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	39.1%	41.4%	16.6%	2.0%	1.0%	10	
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	33.1%	40.8%	23.1%	2.3%	0.7%	14	
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.2	42.2%	37.4%	16.5%	3.0%	0.9%	13	
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	37.5%	34.6%	20.4%	5.5%	2.0%	13	
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.9	30.2%	36.3%	26.7%	5.2%	1.7%	8	
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	32.6%	38.4%	23.1%	4.4%	1.5%	11	
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	35.3%	39.2%	20.2%	3.5%	1.7%	8	
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	39.3%	39.0%	18.5%	2.3%	1.0%	12	
	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	24.1%	41.1%	25.9%	6.2%	2.7%	13	
13 授業の内容に興味をもてた	3.9	32.4%	36.2%	22.6%	6.1%	2.7%	15		
総合評価		平均値	強くそう思	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう思	無効	
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.0	37.2%	34.5%	22.7%	3.5%	2.2%	326	

(秋学期)

分野	設 問	平均値	強くそう思	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう思	無効 回答数	
			う	思う	言えない	思わない	わない		
			5	4	3	2	1		
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	21.9%	46.4%	26.9%	4.1%	0.8%	6	
	2 授業以外によく予習復習した	3.3	10.8%	31.8%	41.9%	12.4%	3.2%	14	
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	33.1%	42.2%	20.4%	3.1%	1.2%	12	
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	39.1%	38.9%	18.8%	2.3%	0.9%	10	
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	32.9%	39.0%	24.9%	2.4%	0.9%	10	
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.1	39.8%	35.2%	20.7%	3.4%	1.0%	32	
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	37.4%	34.3%	20.9%	5.0%	2.4%	13	
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	27.8%	37.2%	28.2%	5.3%	1.6%	15	
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	32.0%	38.6%	24.9%	3.0%	1.5%	10	
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	34.9%	39.5%	20.7%	3.4%	1.5%	5	
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	40.9%	36.0%	20.0%	1.9%	1.2%	13	
	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	21.9%	42.2%	27.5%	6.2%	2.2%	26	
13 授業の内容に興味をもてた	3.9	31.9%	36.8%	24.3%	4.8%	2.2%	30		
総合評価		平均値	強くそう思	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう思	無効	
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.0	38.4%	34.4%	22.0%	3.4%	1.8%	469	

(3) 教職員を対象とした公開授業

① 概要 (目的を含む)

教員の講義力・教育力向上を目指し、教員相互の授業参観を実施した。

② 到達目標

公開授業の実施意義を各教員が理解するとともに、教授方法などを参考とする。

③ 活動内容

教員相互の授業参観を実施すべく、全学の専任および非常勤の教員に対して授業を公開した。授業を公開した教員は3学科で合計5名とした。

④ 評価

農学部としては今回が3年目の活動であったが、参観した教員数は極めて少数であった。この活動の定着のためには教員相互の啓蒙的意識の高揚が必要であり、実施に際しての周知、実施方法の検討が要求される。

4 昨年度（平成 24 年度）に提案された予定・課題の達成度について

授業評価アンケートの集計結果は大学 HP から公開を行った。現在、農学部全体、各学科および教職コースの結果をまとめて公表しているが、今後科目ごとあるいは担当教員ごとなど、公開の範囲について検討が必要である。農学部教授会においては、教員名の公表を含めた科目ごとの公開について審議され理解が得られている。農学部の授業評価アンケートについては来年度よりアンケート内容を改訂し、講義科目と実験・実習科目とを分けて実施する計画でいる。アンケート項目がやや増えて 22 項目、加えて記述欄を 4 項目とした。記述欄の記入は依然少なく、有効活用するための実施方法などを検討する必要がある。そしてアンケート結果を以後の授業改善にどのように反映させていくかの全体的な議論が行われていくことで、今回のアンケート改訂を有意義なものとした。

また、今年度も 1 年生の基礎学力を把握するために、新入生ガイダンスで高等学校での学習範囲についてのプレースメントテストを実施した（生物資源学科；生物、生物環境システム学科；英語、生命化学科；化学）。これにより、基礎学力不足の学生の把握と直接的な指導並びに学力の不足している授業におけるフォローに繋げてゆくことが期待される。さらに来年度は英語のプレースメントテストを加えて実施する予定である。AP から CP、DP へと繋がる方針をより明確化していくためにも、常に点検を繰り返し、学生の資質向上へと結びつけていくことが必要であると考え。

一方で、心に不安を抱えた学生は顕在化してきており、そのような学生本人や授業を担当する教員、担任、同時に授業を受けている周りの学生に対しても、さまざまな影響を与えつつある。大学での学びを確保するために必要な方策と対応を、部処間で連携し進めていく必要性を感じている。今後も専門家の意見を聞く機会を確保し、より具体的な方策を考えていく必要がある。

これらの検討課題を次年度以降も継続的に改善を達成する上で FD 活動の充実と発展を目指したい。

5 今後（平成 26 年度以降）の予定・課題について

- ・ 新カリキュラムの適切な運営と点検
- ・ 「農学部生のためのキャリア形成支援プログラム」の策定
- ・ 授業評価アンケートの授業への還元方法の検討
- ・ 授業評価アンケートの公開方法および範囲の検討
- ・ 各種研修会（学内、学外）への参加への啓蒙的活動
- ・ 教員相互の授業参観の組織的な取り組みと参加者の増員の施策
- ・ 基礎学力不足の学生の把握と入学後の適切な指導対応
- ・ 大学院 FD 委員会との連携強化

§ 工学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

工学部全教員が Tamagawa Vision 2020 を共有して、「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかることを継続している。

平成 25 年度入学生に適用されたカリキュラム改定では、入学生の学力不足対応のため 1 年次には専門科目を入れずに基礎教育を 3 学科共通で用意した。同時に平成 25 年度入学生から 16 単位キャップ制および GPA 警告制度・同卒業要件が揃って適用された。

このような状況の下、理念・目標の現状に即した具現化のため、社会に受け入れられる人材輩出を持続する教育のあり方を学科ごとに方針として提示し、学部として共有することにした。一方で、現況に対する適切な対応を確保するため、16 単位キャップ制および GPA による新警告制度の下における学生の勉学状況を分析し、その結果と課題を把握し共有するとともに、より効果的で充実した指導の在り方を共有することにした。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

平成 20 年度末までは工学部 FD 活動の多くは ISO9001 教育マネジメントシステムの活動によるものであった。現在はマネジメントサイエンス学科およびソフトウェアサイエンス学科の 2 学科が ISO9001 のシステムを運用している。機械情報システム学科は平成 21 年度より簡易化した PDCA のサイクルの運用を継続している。

学部としては ISO の活動の有無にかかわらず、FD 活動は学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観など、授業評価総合検討会および主任会、教務担当者会で運営している。

現状では毎年のカリキュラム改定および 16 単位キャップ制・GPA 警告制度への移行等、直近の課題が多いため、平成 24 年度に続き平成 25 年度も全専任教員参加による工学部 FD 研修会を年 2 回開催した。

3 平成 25 年度の活動内容

(1) 工学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

第 1 回 工学部 FD 研修会：平成 25 年 9 月 12 日（木） 15:00～16:50

「社会に受け入れられる人材（技術者）を持続的に輩出するための各学科の方針」

「16 単位キャップ制・GPA 警告制度下における学習状況分析結果」

第 2 回 工学部 FD 研修会：平成 26 年 3 月 13 日（木） 11:00～12:00

「16 単位キャップ制・GPA 警告制度下における学習状況分析結果および対応策」

② 到達目標

第 1 回：社会に受け入れられる人材輩出を持続することを意識した、現状報告および現方針・今後の方針を学部として共有する。本年度春学期スタートした 16 単位キャップ制下の学生の勉学状況等分析結果報告および今後の課題を共有する。

第 2 回：16 単位キャップ制下の学生の状況、GPA 警告制度の状況分析結果報告を

もとに、具体的な課題と指導対応方法を共有する。

③ 活動内容

- ・「社会に受け入れられる人材（技術者）を持続的に輩出するには（現状と課題）」として学科方針・成績優秀者対応・退学者減少対策・学習障害対応等について現状報告および対策方針提示（各学科主任）
- ・16 単位キャップ制・GPA 警告制度下の状況分析結果の学部全体・各学科についての報告（教務主任・各学科教務担当）
- ・数学・物理について予習復習時間を設定した指導の報告（数学・物理支援指導担当）
- ・警告を受けた学生の動向と今後の指導（教務主任）
- ・3 学科共通実施「導入ゼミ」実施報告（導入ゼミまとめ役）
- ・授業評価アンケートの評価の年次変化・学年別平均値（FD 担当）
- ・学外 FD フォーラム等参加報告（参加者）

④ 評価

状況分析結果および今後の対応方針を共有し、工学部のあり方や指導に効果的に反映できたものとみられる。工学部では FD 研修会終了後に「発表資料+発表者による解説」から成る記録冊子を作成し、必要に応じて利用可能となっている。

特に平成 25 年度から適用された 16 単位キャップ制・GPA 新警告制度・改定カリキュラムの下における、以下の学生の学習成果情報を共有できたことは、今後の対処に有益である。

平成 25 年度の入学生の 12%が 2 セメスター終了時に警告 2 回目に至っており、前年度比約 1.5 倍となった。1 セメスターで警告を受けた学生の 75%が続く 2 セメスターで警告 2 回目を受け、学科別では 60%から 100%となり、学科による差が大きかった。互いの学科の指導方法を参考にした上で対処することによって良い結果がもたらされる可能性がある。平成 24 年度の入学生では 2 セメスターまでに 2 回目の警告を受けた学生は 4 セメスターまでにほぼ全員が退学に至っている。また、各学年とも 2 年次末までにほぼ半数の学生が警告を受けている状況となっている。

また、16 単位キャップ制および GPA 警告制度によって、1 年生の平均単位取得率は向上している。セメスターが進むにしたがって二極化が進行する傾向もみられる。成績上位の学生の GPA は旧制度下より向上している。成績中位の学生の勉学促進策が今後の動向を左右することが考えられる。

これらの状況および入学生が多様化する中、卒業までの動向がたいへん心配される。このため、意欲向上につながる分かり易い授業方法や分かり易い課題の出し方等のさらなる改善を継続する必要があることを認識・共有できた。復習に偏らずに予習も活用する方法はもとより反転学習等の採り入れも検討課題となろう。

(2) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

工学部では授業内容・方法・スキルの向上等、継続的な授業改善をはかるために、平成 12 年度秋学期より継続して「学生による授業評価アンケート」を実施している。

② 到達目標

工学部各学科の全教員全科目について実施し、継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。学科および学部の授業評価検討会における評価検討を通じた授業改善、カリキュラムの変更・改定に役立てる。

③ 活動内容

平成 24 年度に続き平成 25 年度も US 科目の内、工学部向けに設定された授業についてもアンケート実施対象として組み入れた。例年通りの方法で実施した。集計結果は科目ごとのデータおよび全体集計データとともに科目担当者に届けられる。集計結果の内容は科目担当者が作成した授業チェックシートとともに科目単位および学科単位で次期の授業に反映されるよう、PDCA を実行する努力をしている。学外には総括した内容を Web で、学内には全ての詳細を学生による授業評価報告書として大学 8 号館ロビー等で閲覧公開している。

また、16 単位キャップ制や GPA 警告制度の導入効果をみるための準備として、平成 25 年度の集計データを元に学年別集計および授業種別集計を再集計した。

④ 評価

教員、科目とも参加率はほぼ 100%を維持できている。授業評価平均値は安定している。特に自習が年々向上し、理解も向上し、意欲も僅かではあるが向上しており、総合評価の最小値も向上中である。種々の対応策による効果とも言えよう。集計結果に対する科目担当者のコメント記載については記載が授業終了後であるため、受講生には直接伝わらないこともあって、記載促進には難しい面がある。

学年別再集計結果によれば、学年が高い程、意欲・理解・自習の評価が高い傾向があることがみとめられる。勉学の積み重ねによる効果と考えられる。また、講義より実験実習系科目の方の評価が高い傾向があることが分かった。

(3) 授業評価検討会

① 概要（目的を含む）

学生による授業評価アンケートとともに教員自ら授業を評価する科目ごとの「授業チェックシート」を基にして、学科ごとに実施した「授業評価検討会」の報告を持ち寄って、学部として実施する「授業評価検討会」にて、総合的に検討を加える。検討結果は学部としての改善の実施、および各学科へフィードバックされ、学科における改善の実施に寄与する。

② 到達目標

継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。改善成果を評価する。学科として今後必要な改善点を確認するとともに、学部として必要な改善点を提言する。

③ 活動内容

授業評価検討会実施日：春学期 平成 25 年 9 月 5 日、秋学期 平成 26 年 3 月 7 日

④ 評価

授業評価アンケート・授業チェックシート・授業評価検討会によって、授業改善のサイクルが定着している。組織としての活用が継続的課題となっている。多様化する

学生に対応するため、授業の方法や分かり易い課題の提示方法、板書やスライドの適切な在り方等に関する視点も重要になっている。

(4) 学修支援

① 概要（目的を含む）

主に1年生を対象とする基礎学力向上のために実施している数学・物理学の「学修支援」は活用した学生の単位取得率が高い等の効果は表れているが、活用率を向上させることが継続的課題となっている。平成25年度は数学・物理学の「予習復習指導時間」を設定し、その効果も期待されている。

② 到達目標

- ・活用率の向上
- ・支援の充実（「予習復習指導時間」の設定）

③ 活動内容

平成25年度は1年生向けに数学・物理学の「予習復習指導時間」を設定し、助手および教科科目担当が指導した。数学では高校教員OBチューターによる指導も推進した。物理学では高校教員OBチューターの定年退職後の補充ができず、チューターによる個別指導は実施できなかった。

数学・物理の「予習復習指導時間」については、工学部紀要にその報告（著者：予習復習時間の指導担当教員）が掲載される。

④ 評価

「予習復習指導時間」を設定したことによって、その時間の出席率が高い程成績上の成果がみられ、支援の充実度は増している。また、教科科目担当教員とチューターの連携・打ち合わせに留意して支援を効率よく行っている。学修意欲が低く出席率が低い学生のモチベーションの向上が課題となっている。ただし、チューターとして適切な高校教員OBの補充が極めて困難な状況にある。

(5) 発達障害学生支援

① 概要（目的を含む）

発達障害あるいは発達障害とみられる学生の入学事例が毎年みられ、対応を模索しながら可能な範囲の支援・指導が続いている。当該学生の学外実習、卒業研究および就労が課題となっている。

② 到達目標

当該学生の就労や将来を意識した支援・指導の在り方の目処を立てる。

③ 活動内容

前年の活動に対応可能な範囲で継続している。加えて二次障害を生じないよう当該学生の状況の変化にも気を配る対応ことも、可能な範囲で実施している。父母等および医師、カウンセラーとの可能な範囲での情報交換によって当該学生の状況改善につながる。他大学の支援対応に関する情報を得て参考とする。

④ 評価

対象となる学生の進級・卒業や新入学による指導経験を重ねること、および、学内

外の発達障害学生に関わる研修参加によって、指導の在り方に目処が立ちつつある。当該学生の現状と今後や将来を考慮した指導を基本に、インターンシップや卒業研究の指導実績が得られている。インターンシップの受け入れ先の確保、就労に関しては当該学生、父母および保証人（以下、父母等）の現状認識を高める良いきっかけとして捉えるとよい。これにより、就労に関する父母等の理解と協力が得られる例もあるが、理解が得られない場合の就労指導対処が課題となる。父母等の意向も様々であり、対応が難しい結果を生じる例もある。

発達障害の診断を得ている学生、発達障害とみられるが診断を受けるに至っていない学生および一般学生の区別もはっきりしない状況が現実となっている。したがって、他大学ではこれらへの支援にユニバーサルデザインを採り入れることを提唱している例もある。大学としての対応方針も明確にする必要も生じてくるものとみられる。現場教員が対応する支援負担も自ずと多くなりがちである、また、特性の異なる個々の学生への適切な支援が求められる。このため、たとえば「大学として、状況把握と支援内容の判断ができる臨床心理士（常勤）＋各学部のコーディネーター」の構成を用意する等の対応が望まれる。判断のできる第三者が授業における当該学生の状況を視て判断する手法も支援や父母等の理解を得るためにも効果的であると考えられる。

(6) 学外セミナー・現況調査等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

現状における課題あるいは今後のカリキュラム改定にかかわる課題に関する知見を得るため、学外のシンポジウムや研修会に参加して、その内容を活用する。

② 到達目標

参加した研修等の内容を活用する。

③ 活動内容

FD フォーラム「社会を生き抜く力を育てるために」（主催：大学コンソーシアム京都、会場：龍谷大学、開催日：平成 26 年 2 月 22, 23 日）に 2 名が参加した。シンポジウム 2 件および分科会 1 件に出席した。

④ 評価

参加報告は工学部 FD 研修会にて実施することが基本であるが、今回は研修会の時間の制約から省略し、「工学部 FD 研修会解説付き記録」に掲載することにした。資料等は必要に応じて、学科会における報告や個別の報告、回覧等により、活用されている。

シンポジウムでは地域社会と協調して、学生が学び育つ環境を創る提案がなされ、その現況を把握した。また、「社会を生き抜く力」を育成し、「未来を切りひらく学生」を育てるためにはどのようにすればよいのかについて現況を把握した。

分科会は「発達障害学生の支援 - 社会と「ツナグ」-」に参加した。就労や自立支援も大きな課題であり、地域の発達障害支援センター、ハローワーク、企業の連携との連携が有効であることが紹介された。京都外語大学で構築された支援の仕組みが紹介された。これまでの多くの例と異なるのは診断を受けていない学生も支援対象としている点であり、現実的に対応が望まれる仕組みとしてたいへん参考になった。守秘義務にとら

われ過ぎない仕組みとなっている点も現実的なものとなっている。

4 昨年度（平成 24 年度）に提案された予定・課題の達成度について

(1) Tamagawa Vision 2020 の実現へ向けた課題

16 単位キャップ制、GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、対応する改定カリキュラムのもとで、指導上の課題認識や結果評価を行い、効果的な改善を継続することが課題となった。平成 25 年度入学生向けに改定されたカリキュラムの下 16 単位キャップ制および GPA 警告制度の初年度の現状データを把握し、共有するとともに、今後の対応策の端緒となった。

(2) 現状における課題

入学生の学力不足対応、発達障害者支援等の充実化が求められている。技術者に求められる学力以外の基礎力の育成も課題となりつつある。

入学生の学力不足対応指導は高校教員 OB のチューターと専任教員の連携により、年々、指導方法を改善し、成果を挙げつつある。学習支援については毎年学会および工学部紀要に投稿されている。また、16 単位キャップ制を充実したものにするための対策として、今年度には数学・物理の予習復習指導時間を設定して対応し、成果を得た。一方、定年退職されたチューターの補充ができず、本来 2 名であった物理の高校教員 OB のチューターが本年度は不在となった。高校定年退職チューターの後任の補充をはかったが、高校における再雇用の活発化の影響を受け、達成できず、今後の補充の見込みも立たない状況となっている。このため、平成 26 年度は物理の予習復習時間および学習支援を停止せざるを得ない。

また、1 年次の学部共通の主要科目では学習記録帳を用意した。学部共通として開設した「導入ゼミ」は全教員で強力に指導した。さらに、「キャリアデザイン」も学部共通で開設した。それぞれ一定の成果を上げていると考えられるが課題もあり、次年度は調整して臨むことになった。

発達障害者支援については、現在の環境下での卒業までの対処の在り方に目処が立ってきた。これらの学生にとっては卒業させることを第一の目的として支援するのではなく、将来のためになる方向へ状況が進展するよう支援することが重要である。父母等の理解や、健康院カウンセラーおよび医者との連携（二次障害の防止策等のため）等によって、ケースバイケースで対応している。これらの対応によって当該学生の状況が改善し、本人にとって将来のためになる方向へ状況が進展している例も出てきている。一方、このような学生にとって GPA 警告制度下で勉学を継続することが難しくなっているのも現実となっている。

警告を受けた学生の父母等が強い不満を表明するケースも見受けられる。とくに、受験前・入学前に GPA 警告制度の情報を得た認識の無い父母等の場合に不満が強い。

(3) FD 活動の在り方に関する課題

現状対応課題が FD 活動の主たる対象であった。これについては研修会による現況データおよび分析結果と指導方針の共有がなされた。一方、参観授業や授業評価アンケートについて、組織としての効果的な授業手法等の共有が継続課題となっていたが、多忙な中、進展が難しく、継続課題とせざるを得ない。ただ、参加者が極めて少ない状況が続く参観

授業に関しては、オムニバス形式の授業を参観授業の対象とするなどの工夫が次年度に向けてなされている。(オムニバス形式の授業の場合、当日の担当者以外もその時限に他の授業が入っていないため、参観し易い。)

当初、参観授業(研究授業)や授業評価アンケートについて、組織としての効果的な授業手法等の共有が課題となっていた。現況は16単位キャップ制、GPA警告制度等への対応に注力し、カリキュラム改定が毎年続き、複数カリキュラムが併存している状況下でもあるため、参観授業(研究授業)や授業評価アンケートについては課題の認識のみにとどめた。

5 今後(平成26年度以降)の予定・課題について

(1) Tamagawa Vision 2020の実現へ向けた課題

16単位キャップ制、GPAによる警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、対応する改定カリキュラムの下で、指導上の課題認識や結果評価を継続し、効果的な改善を継続することが課題となる。

(2) 現状における課題

前項の課題に沿って、入学生の学力不足対応、発達障害者支援等の充実化が求められている。いわゆる底上げ対応に力点が置かれざるを得ない状況が続くが、一方で優秀な学生を伸ばす対応も課題となっている。技術者に求められる学力以外の基礎力の育成も課題となりつつある。

(3) FD活動の在り方に関する課題

現状対応課題がFD活動の主たる対象である。参観授業や授業評価アンケートについて、組織としての効果的な授業手法等の共有が継続課題となっている。

§ 経営学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

- (1) 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。
- (2) 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。
- (3) 21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部一少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。
- (4) 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、国際経営学科主任、観光経営学科主任、教務主任、学生主任が中心となって FD 活動を実施する。教務主任と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会の運営にあたる。観光経営学科の授業などで得られた成果を観光学部（平成 25 年度新設）の FD 活動として展開することがある。

3 平成 25 年度の活動内容

(1) 大学コンソーシアム京都主催 第 18 回 FD フォーラム参加報告

① 概要（目的を含む）

平成 25 年 5 月 30 日に昨年度と同様に FD フォーラム参加報告に基づいた研修を実施した。第 18 回は「学生が主体的に学ぶ力を身につけるには」が総合テーマとして掲げられていた。今回の研修では FD 活動への学生の関わり、学生同士の学修支援、時間外学修を検討した。

② 到達目標

- ・各大学の事例を中心としたシンポジウムの紹介を通して、学生が推進主体となって進める FD の意義と課題を共有する。
- ・ピア・サポート、ピア・エデュケーションといった学生支援の実施事例を知る。

③ 活動内容

まず今回のフォーラムに参加した山田雅俊准教授から、参加するにあたって持っていた関心、参加したセッションについて説明があった。学生と教員の距離感、学修の方向づけ役としての教員といった関心があり、シンポジウム「学生とともに進める FD」、分科会「学生の縦のつながりを活かした学生支援」に参加したことが報告された。その後、質疑応答・討議へと進んだ。

シンポジウムの報告として、学生を FD の受益者という立場だけでなく推進主体としてもとらえ、FD 活動を推進している大学の事例を共有した。学生 FD の意義として学生自身の成長、授業に臨む姿勢の変化などがあげられており、学生を FD 活動に参加させることで学生の意見・期待を把握し、教員による FD につなげることができるという見解も示されたことが報告された。一方、参加する学生が一部に偏る、FD はやはり教員の仕事である、といった課題があることも紹介された。

分科会に関する報告ではピア・エデュケーション、授業外学修などを取り上げ、シ

ンポジウムの報告と同様に各大学の事例の共有を起点として研修を進めた。設備の構築と同時に上級生による下級生の支援といった学生間のつながりが学修の一部を構成する事例も紹介された。

④ 評価

授業外学修の支援に関する報告内容はラーニング・コモンズの運用、アクティブ・ラーニングのさらなる推進につながるものであり、この研修においても討議の中心になった。フォーラムの報告では各大学における取り組みの成果・課題が多岐にわたって紹介されているため、学部における今後の運用においてたいへん参考になる点が多かった。

(2) 講演会

① 概要（目的を含む）

英語の学修と経営の専門諸分野の学修の連携を図ることを目的として、平成 25 年 10 月 24 日に英語による専門科目の授業展開に関する教員研修会を実施した。平成 27 年度入学生から始まる新たな教育課程において、英語科目（ELF, English as a Lingua Franca、以下 ELF）と専門科目の連携を強める FD 活動の出発点と位置づけた。

② 到達目標

- ・ 学生が英語科目と専門科目で修得できる力の接点を探る。
- ・ 専門科目を英語で実施する際の授業展開・教材開発の技法を知る。

③ 活動内容

経営分野で講師経験のある Tom O'Sullivan 氏を迎えて講演会を開催した。まず講師がこれまで担当した授業に基づいて、さまざまな授業方法とそのねらい・学修効果について説明があった。会計、ファイナンス、経営戦略、人的資源管理、経済学と、経営学部の教育課程で展開している分野を幅広く取り上げた講演であった。

④ 評価

平成 27 年度入学生の教育課程では国際経営学科を 3 コースに再編する（下記 4. 参照）。学生が専門分野を通してグローバルな視点で考える力を養成するために、学部・学科・コースの段階的な設計が求められる。

世界標準で学修するという学部の針路に沿うためには、たとえば日本語を英語に置き換えるというだけではないことも指摘された。グローバルな視点の養成、日本文化の発信という意識で取り組むことも必要になってくる。今回の研修では専門科目を英語で学ぶという点に絞ったため「接点」という意味では部分的になっているが、参加した教員が担当している授業に照らし合わせて、ミクロレベルの FD にも取り込むことができる講演であった。今後、ELF と専門科目の連携をより強めて、コース目標、各科目の目標へとつなげたい。

(3) ハラスメント防止研修会

① 概要（目的を含む）

平成 25 年 9 月 19 日に大学におけるハラスメント防止を目的に実施した。定期的の実施することで意識を高く持続することが期待できる。

② 到達目標

ハラスメントの定義や種類、最近のハラスメントの事例を知る。そのうえでハラスメントのない環境の整備に継続的に取り組む。

③ 活動内容

桑島英美弁護士による講演と質疑応答であった。さまざまな組織における事例やハラスメント防止に向けた取り組みを交えて、とくに大学において注意すべき点を具体的に伺った。

④ 評価

講演には過年度と同じ内容も含まれており、繰り返し伺うことであらためて意識を高めることができた。また前回の研修後に着任した教員もいたため、基本と思われることであっても教員間で認識を共有する意義があった。

(4) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業評価アンケートを実施している。今年度は春学期・秋学期ともに実施した。

② 到達目標

学生の学修状況を把握するとともに、各教員のさらなる資質向上を図る。

③ 活動内容

独自の方法で実施している科目及び演習科目を除く経営学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。マーク式の集計は外部業者に依頼し、その結果を科目担当者別に配付してFD活動に活用するよう継続的に呼び掛けている。記述式は科目担当者が個別に活用している。

④ 評価

マーク式のアンケートでは質問項目を改訂して2年経過した。アンケート結果は各科目担当者が個別に活用しているが、複数年の結果を比較することでさらなる授業改善が期待できる。またシラバスの様式変更を受けて、学生がシラバスを活用するようになったのかという点も検討が進むと考えられる。シラバスの見直しにもつながるであろう。

次年度から授業時間の設定が一部変更になる。とくに平成25年度以降の入学生は16単位キャップ制のため、いわゆる「空き時間」が増えている。今後、学修時間の確保、授業外学修の成果、教員による課題設定にもアンケートを活用できればより望ましい。

4 昨年度（平成24年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度の予定は概ね達成できているものの、毎年3月に実施していた研修の開催を見送った。これは来年度に向けた事前準備が優先課題となったことによるものである。

今年度は春学期に国際経営学科改組の検討会を頻繁に行い、平成27年度（2015年度）入学生から運用を開始する新しい教育課程を作成した。しかし一部既述のとおり、従来から展開されている英語科目との連携、世界標準で専門科目を学ぶといった視点でさらなる

検討が必要になったため、他部処との情報共有、3 コース制におけるコースの運営を推進する FD 体制の整備が優先課題となった。

学外セミナー等への参加もほぼ例年どおりであった。折戸晴雄教授が第 19 回 FD フォーラム（平成 26 年 2 月 22・23 日開催、大学コンソーシアム京都主催）に参加した。平成 26 年度の研修会で参加報告と討議を予定している。

平成 24 年度入学生は経営分野の 5 コース（国際経営学科）と教職コース、履修モデル、平成 25 年度入学生は国際経営学科 5 コースで教育課程を運用している。国際経営学科では初年次に 2 年次の専門基礎ゼミの履修、2 年次に 3 年次のコース選択がある。学生が定期的に目標や将来のキャリアを意識する好機になっており、具体的な目標を掲げられるようになった学生も増えているようである。学生がより高い成果をあげられるように支援を続けたい。

授業参観は昨年度と同じ 6 科目であった。今後、経営学部ではたとえば必修科目と選択科目、受講者数、コース科目（国際経営学科）といった区分による公開科目の設定も検討するとともに、授業参観によるコース学修の成果などにつなげることも考えられる。

経営学部の目標の 1 つにも掲げている資格試験の合格（認定）を支援する活動も継続して実施し、検定試験合格助成制度を利用する学生の増加を目指す。

5 今後（平成 26 年度以降）の予定・課題について

平成 26 年度は当面、平成 27 年度入学生から運用する国際経営学科のコースの運用と各科目の授業展開を中心に FD を推進する。まず春学期には ELF と専門科目の連携を図るための研修会として、専門科目を担当する教員が ELF における経営学部学生の学修成果を共有することを中心に実施する予定である。それと同時に学部で決定したコース担当者によって、コース運営の検討を開始する。秋学期にはコース別の運営体制・目標の具体化を図る。学部・学科として共通する事項とコース別の特性を反映させた事項がうまく融合するように議論を重ねたい。

現在、経営学部の FD 活動は教育面に重点が置かれている。教育課程の見直しが続くなかでコース運営、授業、学生の学修支援が中心になっているが、教育のための研究という視点で FD 活動の充実が課題となっている。コース運営の検討が進むなかで、この課題を検討する機会の確保が期待される。

FD フォーラムのシンポジウム及び分科会の報告を含めた研修会（春学期）、授業評価アンケート（春学期・秋学期）も例年どおり実施する。

§ 教育学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

本年度のFD活動への取り組み理念・目標は、平成24年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指し、指導に当たる教員が自らの資質と能力を向上させることにある。」

2 学部におけるFD活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及びFD委員、通信教育部長、通信教育部教務主任、FD委員の8名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD委員会が学部におけるFD活動計画(企画・運営)の策定、FD活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また、委員会決定事項を教授会への議案提起を行い、FD活動の推進に努めている。

3 平成25年度の活動内容

(1) 研修会等 (FD研修は(4)で別記)

【通学課程】

① 概要 (目的を含む)

教員養成の、教員養成における課題や展望を再認識した上で、日常の指導、教育実践に取り組んでいくことを目的に、兼担の先生方を中心に教師教育リサーチセンターが開催するシンポジウムや講演会に参加した。

② 到達目標

今日の教育実践における先進的な取り組みや課題に触れ、研究諸活動および日々の授業実践に活かしていく。日本の教育の課題と展望について学び、教員養成における指導、教育実践に活かしていく。また、参加者同士のネットワークを築く。

③ 活動内容

教育実践学会主催のシンポジウムおよび講演会への参加 [平成25年12月1日(日)]
教員養成フォーラムへの参加 [平成25年10月20日(日)]

④ 評価

学会など学外の活動やIBの講演会が重なったため、参加が難しい教員もいたが、教育学部から教員が参加することができた。各シンポジストの立場からの見解や知見から学んだことを、「教職実践演習」などの授業に活かしていける内容だった。

(2) 学生による授業評価アンケート

【通学課程】

① 概要 (目的を含む)

学生による授業評価(教育学部では「リフレクションシート」と称す)を全授業で実施し、集計結果は学部全体の平均と比較できる形で、各授業担当者にフィードバック

クする。目的は、各授業担当者が新学期に向けて授業改善すること、また、学部・学科・学年別の集計結果の傾向や課題を学部全体で共有することを目的とする。

② 到達目標

- ・平成 25 年度からの新カリキュラムに対応したリフレクションシートの改訂を図る。
- ・専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクションシートを実施する。ただし、授業評価アンケート実施日の出席者が 10 名未満の授業については集計せず、各担当教員が授業改善のために活用する。
- ・実施した授業評価の集計を外部委託し、データ分析と集積を試み、教員の授業改善、また学生の傾向や課題を共有する。

③ 活動内容

- ・平成 25 年度秋学期は、春学期に実施した授業評価アンケートの課題を改善した授業評価アンケート（リフレクションシート）に改訂した。
- ・専任教員、非常勤講師が担当する教育学部のすべての授業での授業評価アンケート（リフレクションシート）を実施した。

④ 評価

評価結果については、学部全体、学科別、学年別の平均値や傾向について、教育学部の全教員にメール配信し、結果と課題を共有することができた。また、秋学期に授業評価アンケート（リフレクションシート）の文言などに改善を加え、様々な授業や学生により対応できるように改訂した。

教育学部で実施した授業評価アンケートの結果は概ね良好であるが、予習・復習に当てる時間が平均結果も学部全体・学年別・学科別のどの平均も「1 時間未満」で大きな課題と映った。しかし、学士課程教育センターで実施されているユニバーシティ・スタンダード科目（以下、US）科目「一年次セミナー101/102」の集計結果では、教育学部生については「2 時間以上」は予習・復習している結果となっていた。このことから、改めて、教育学部で実施した授業評価アンケートの集計方法を振り返ると、当日出席者が 10 名以上の授業のみのカウントとなっており（少数のゼミや実技・実習などは除外されている）、更に 1 年生の必修授業である「一年次セミナー101/102」を含む US 科目を教育学部で集計していないため、カウントされていないということが大きく影響していることが見えてきた。したがって、安易に数字だけを見て判断することは危険であることに改めて気づいた。また、教員が考えている「予習・復習」と学生達の認識にずれがないか明らかにしていくことも今後の課題と言える。学生達が、「予習・復習」を机の上で読んだり、書いたりする時間と認識しているために、教育学部で集計した授業評価アンケートの予習・復習時間が少なく出ている可能性も少なくない。そこを明らかにした上で、今後の指導の仕方、また授業評価アンケートの質問事項（何を予習・復習とするのか説明を加えるなど）を検討していくことが必要と言える。

一方、学生達が「勉強/学修」と意識せずに文献検索や観察、情報収集、グループでの打ち合せや段取りの確認をしているのであれば、それはある意味、意識せずに自然に学びを自分の生活の一部に入れていると言えるのかもしれない。つまり、教員が数字に当てはめようとするあまりに、学生達が日常の活動の一部、あるいは楽しみと

して自然に行っている「自由な学び」を「予習・復習／発展学修」という枠に入れようとする中で、不自由なものにしまわないか気をつけないといけないと思う。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

スクーリング授業において、学生による授業評価を全教員が実施し、集計結果は各授業担当者にフィードバックするとともに、『玉川通信』で学生に公表する。目的は、各授業担当者が新年度に向けて授業改善することにある。

② 到達目標

- ・専任教員、非常勤講師のすべてが担当する授業において学生による授業評価アンケートを実施する。ただし全授業ではなく、それぞれの担当者ごとに、最も出席者の多い1科目において実施する。
- ・実施した授業評価の集計を外部委託し、データ分析と集積を試み、教員の授業改善、また学生の傾向や課題を共有する。

③ 活動内容

- ・夏期スクーリングにおいて、専任教員、非常勤講師の全教員が、担当する授業のうち最も参加者の多い授業1科目について、授業評価アンケートを実施した。

④ 評価

評価結果は、全教員の結果をグラフ化したものと比較できる形で、通信教育部の全教員に配布し、結果と課題を共有することができた。

授業評価アンケートの結果は、各設問とも概ね高い評価を得ているが、予習・復習の時間に関しては他の項目よりも低くなっている。ただし、これは集中講義という形式のためにある程度やむを得ない部分もあるが、何らかの形で補えないか、今後検討したい。

なお、アンケートの設問内容についても検討を行っている（後述）。

(3) 教職員相互の授業公開と参観

【通学課程・通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

教員相互の授業参観を実施し、各自の教授法、教授内容についての振り返りを行い、授業改善につなげる。また、関連する科目の教授内容の調整を検討する機会ともする。

② 到達目標

大学FD委員会の提案に合わせて、通学課程は5名の教員が授業参観を行う。公開した教員の教育内容の振り返り、教授法の改善を図るとともに、参観した者の授業改善へも寄与する事業とすることとする。

③ 活動内容

通学課程は5つの授業において授業公開と参観を行った。

④ 評価

通学課程は、新任教員や中堅教員が授業参観を実施した。通学課程は、多忙な大学教員の業務を考慮し、100分全てに参観しなくても良しとし、まずは授業参観のハードルを下げる工夫をした。しかし、同時間帯に開講している授業も多いため、参観者

は従来と変わらず非常に少なかった。ただし、「気軽にお互いの授業を見てもいい」という声かけをしたので、これまでよりも授業参観をする教員側の負担感は減ったと言える。通信教育課程は、本年度は授業参観を実施するに至らなかったが、これは FD 委員の PR 不足によるものと考えており、来年度はさらに積極的に授業公開への参加を呼びかけていきたい。

(4) FD 研修

【通学課程・通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

平成 25 年度は、授業改善に役立つ教員自主企画の FD 研修「授業に役立つ Google ドライブ」と、玉川の教員としての資質をあげることを目的とした学部企画の FD 研修「小原國芳と教育学部設立の背景」の 2 つの研修を開催した。

② 到達目標

「授業に役立つ Google ドライブ」

- ・各教員の授業実践の中での IT 活用度が増えていく。
- ・各教員の授業実践の効率がよくなり、より良い授業の提供に繋がっていく。

「小原國芳と教育学部設立の背景」

- ・玉川の教員としての誇りを持って、日々の業務に取り組んでいくようになる。
- ・教育学部の教員間で、小原國芳の生き方や信念を共有し、愛校心を高める。

③ 活動内容

「授業に役立つ Google ドライブ」は、ワークショップ形式で、Google ドライブの活用方法について清水英典先生を講師に学んだ。

「小原國芳と教育学部設立の背景」は、卒業生であり、小原國芳先生の秘書をされ、そして初代教育学部長となられた石橋哲成先生から、玉川の歴史、小原國芳と玉川、そして教育学部設立までを貴重な写真映像とともにご講演いただいた。

④ 評価

「授業に役立つ Google ドライブ」は、参加者数が少なくはあったが、Google ドライブを活用して授業に活かしていけること、簡単なアンケート調査での活用など具体的なスキルを持ち帰ることができたと言える。ただし、各自 My PC 持ち込みという条件でのワークショップだったが、各自の PC のバージョンなどが異なるため、開始時に少々時間がかかるなど、今後、このような IT 関連の FD 研修をする時の課題も見えた。

「小原國芳と教育学部設立の背景」は、多くの参加者があり、玉川教育や小原國芳についてもっと知りたいという教育学部教員達の意欲の高さが見られた。石橋先生のご講演の後は、玉川の教員としての誇りを持って、日々の教育実践に邁進していきたいという思いを多くの教員達が共有することができたと言える。研修後の懇親会では、石橋先生を囲みながら、FD において大切な教員同士の懇親を深めることもできた。今後の課題は、「現代における全人教育」、あるいは「今に生きる全人教育」とはどういうことになるのか、具体的な現代の社会のニーズと課題の中で捉え直していけると、教職員の日々の教育実践でどう取り組んでいけばいいのか示唆を得られると思う。

(5) その他

【通信教育課程】

1) レポート添削指導およびスクーリングの改善

FD 担当を中心とするワーキンググループを作り、より良いレポートの添削指導法やスクーリングの授業の改善等について論議した。

2) 学生授業評価アンケートの改善

現在、学生のニーズをすくい上げやすく、なおかつ教員の指導方法や授業の改善にもつなげやすいよう、学生アンケートの内容を検討中である。平成 26 年度に、レポート科目は一部の科目について、またスクーリングは夏期スクーリングを担当する全教員について各自 1 科目ずつ、アンケートを実施する予定である。

4 昨年度（平成 24 年度）に提案された予定・課題の達成度について

ここ数年の課題であった授業評価を全科目（専任・非常勤）での実施に踏み切ることができたことは大きな成果と言える。また、学部独自の教育課題を迫及する学部企画 FD 研修では、石橋哲成先生にご講演いただくことができ、玉川の教員としての意識と教員間の親睦を深めることができたと言える。H25 年度からの 16 単位キャップ制という新システムの導入もあり、これまで以上に教員間の信頼と協力が円滑な教育実践に必要となっているが、教育学部の教員が玉川や学生の利益、より良い教育実践について真剣に考えていらっしやることをお互いに再確認できたことは、大きな成果と言える。

5 今後（平成 26 年度以降）の予定・課題について

平成 25 年度に引き続き、日常の教授内容と方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理念に基づくも、今日の社会の要求に応じることのできる人材の育成に取り組むことは重要である。25 年度入学者より、授業と単位の実質化を図った教育課程が展開され、それに応じた予習・復習の充実を指導してきたが、US 科目「一年次セミナー101/102」の授業評価アンケートで教育学部の予習・復習時間が「2 時間以上」であったことは、初年次教育の成果と言える。また、授業評価アンケートの項目で前述しているが、学部で実施した授業評価アンケートの予習・復習時間の結果から、データの見方に注意が必要であることも確認された。学生達が何を「予習・復習」と認識しているのか分析した上で、学生の指導を検討していくことが来年度以降の課題と言える。

また、昨年度の報告書でも指摘されていたが、教員の職務のひとつとなる研究活動の活性化にも学部挙げての努力は今後も必要である。

§ 芸術学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

芸術学部のミッションは「芸術による社会貢献」であるが、現代の社会は経済を中心とするグローバル化や少子高齢化、情報化といった社会の変化が労働市場や産業・就業構造の流動化などが進行している。このような時代にあつては、我が国の人口動態も踏まえつつ、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討して柔軟に対応していく必要がある。世論調査によると、国民の60%が世界に通用する人材や企業、社会が求めている人材を大学は育てているかの質問に否定的な回答をしているように、人材養成や研究の目的が社会の要求と乖離していると指摘されている。大学は未来を築くための教育や研究に大学が総力を挙げて取り組み、社会に貢献することが使命である。特に芸術分野は新産業分野でも期待される感性や想像力などの育成と深くかかわる。また、従来の教育や福祉に加えて、芸術と産業分野との関連性と活用が高まっているように、常に社会とのかかわりを意識しながら教育体制や教授法、研究戦略などにPDSAを用いて改善をおこない、柔軟性、機動性をもった組織として教員団を編成しなければならない。また、学修の修得主義を推進していくためには、学生を主体とした授業方法の研究や、総合的な学修環境を形成するプロジェクト型授業や外部との連携授業などを推進すると共に、教員団のチーム力形成が重要である。そのためには次のような4つの目標が考えられる。①情報収集力、②得た情報から問題や課題を発見する複眼的な分析力、③発見した問題や課題を共有し、教員個々人の問題や課題とする仕組み、④問題や課題を解決するチーム力の形成、⑤修得主義の実施等が重要と考える。

2 学部におけるFD活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員及びFD委員がFD活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会で情報の共有や分析をおこない、目標や課題の設定、及び手段などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーはもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果、及び方策等を拡大教授会で報告し、全学部教職員の組織的な取り組みとする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部FD中核メンバーであるので、学科内の取り組みをまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動してFD活動を推進させている。大学FD委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達、及び他学部・他大学におけるFD活動の情報収集を行うと共に、情報の共有を図り、FDの組織的活動が円滑におこなわれる役割を担っている。

3 平成25年度の活動内容

(1) 講演会の開催

① 概要（目的を含む）

平成26年度の芸術教育学科新設を踏まえ、新学科の目指すべきもの、課題や展望、将来性などについて考察するとともに、芸術教育の可能性について詳しく解説を行うものである。教員養成の充実、教員の資質向上などの社会からの要請に応えるためにも、「芸術による教育」の意味をもう一度吟味し、それらを実践、先導できる人材の

育成を実現できるよう、教職員、さらには、教員を志望する学生らと共に学び、共に考える。

② 到達目標

玉川大学芸術学部のミッションである「芸術による社会貢献」の達成を目指した教育体制を確立させるため、教員、スタッフ全員のモチベーションと意識の向上をはかる。また、新学科である芸術教育学科の展望と目標、芸術教育の可能性についての学びを深め、時代の変化に即した最新情報の共有を徹底させる。

③ 活動内容

下記の日程で講演会を開催した。

実施時期：平成 25 年 11 月 10 日（日）13：00～15：00

コスモス祭 芸術学部講演会

場 所：本学視聴覚センター101 教室

テ ー マ：ジャパンアーツのソフトパワーが日本を元気にする！

「文化教育立国と芸術による教育」

講 師：玉井 日出夫 元文化庁長官 元玉川大学教育博物館館長

石川 誠 京都教育大学名誉教授 玉川大学客員教授

企画・構成：中村 慎一 玉川大学芸術学部長

司 会：辻 裕久 玉川大学芸術学部教授

④ 評価

外部から主に教育機関関係者、本学園の教職員並びに学生、計 50 余名が参加した。知識基盤社会、情報化社会と言われる現代における感性や創造性の重要性、また、この国の歴史の上に積み重ねられてきた価値観や美意識というものが、いかに芸術の機能に由るものであり、人格形成上重要であったかが解説された。年代層の幅広い参加者により、様々な意見が交換され、芸術教育の今日的な課題に対し、まさに指針となる内容となった。

(2) 授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

① 概要・活動内容（目的を含む）

平成 25 年度は予定通り年 2 回の授業アンケートが芸術学部で開講されている全ての授業について実施された。個々の科目に関するデータおよび統計的データのすべてを、Blackboard を通じて学部内の全学生および学部内の全教員に公開する。また、個々の科目についてのデータは伏せつつ、統計的データを、持ち出し不可の冊子として一般の閲覧に供することを検討している。さらに、各学科の専門科目の担当者が授業概要と授業成果をまとめた授業成果報告書を作成し、提出する。

② 到達目標

芸術学部 FD 委員会においては、授業アンケートのデータを子細に分析し、今後の FD 活動の方向性を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容・形式の妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な教育連携を可能とする。

③ 評価

本年度も昨年度に引き続き 2 年次以降の専門科目に関して授業報告書を作成し、様々な情報を共有しつつ、今後の教育方針に関する議論の土台を築くことができた。また、授業アンケートの結果に関しては、芸術学部の拡大教授会において、その結果報告を紹介するとともに、学生の学修状況、その傾向などについての情報を共有することが出来た。

(3) 学外セミナー等への教員派遣

1)

① 概要（目的を含む）

第 51 回全国高等学校美術・工芸教育研究大会 2013 香川大会（開催期：平成 25 年 8 月 7 日～9 日）への教員派遣。高等学校教諭との交流および研究会参加による教師力向上、及び高等学校の教育現場の現状を調査し、高大連携の方策を立案する基礎資料とする。

② 到達目標

高等学校における芸術教育の現状、問題意識についての理解を深める。その上で、大学における芸術教育のあり方を見直し、高校から大学への発展的展開を考え、高大連携授業を有意義なものにしてゆく。

③ 活動内容

上述の研究大会において実施された講演会、パネルディスカッション、研究分科会に参加し、高等学校における美術科指導法についての様々な知見を得た。

④ 評価

本学部からは小倉康之教授、椿敏幸准教授の 2 名が参加。それぞれ研究会や懇親会等に参加し、多くの高校教員と意見交換を行うことができた。今後、高大連携の教育プログラムを展開していく上で、極めて重要な指針を得ることができた。

2)

① 概要（目的を含む）

全国私立大学教職課程研究連絡協議会 第 33 回研究（開催期：平成 25 年 5 月 25 日～26 日）への教員派遣。愛知県名古屋市の愛知大学名古屋キャンパスで開催された同協議会に 3 名の教員が参加。教員養成課程を持つ全国私立大学の現状と課題についての知見を広め、新学科設立に向けての長期的、総合的な戦略計画の基礎資料とする。

② 到達目標

行政の施策や動向を知り、時代の流れと社会のニーズに即した教員養成課程の形成を目標とする。本学部と同じく開放制教員養成制度による教育を行っている各大学の状況や課題、また、教職大学院の現状の把握を行い、本学部の教育システム、並びに教職員の組織的な質向上に活かして行く。

③ 活動内容

「教員養成政策の最近の動向について一学び続ける教員の養成を目指して一」と題し、池田 貴城氏（文部科学省高等教育局大学振興課長）の基調講演が行われ、そのうち、各大学から教員養成の在り方、また、教職大学院についての課題等が報告された。

さらに二日目には午前の部、午後の部と各分科会に分かれて終日の研究会が行われた。初日夕刻の情報交換会では、各大学からの教員のみならず、事務系スタッフも加わり、まさに貴重な情報交換の場となった。

④ 評価

本学部からは中村慎一学部長、辻 裕久教授、椿敏幸准教授の3名が参加。それぞれ各分科会に分かれ、意見交換を行うなど、様々に活動を行うなかで、新学科の設立、運営に大いに参考となる多様な情報を得る事が出来た。また、本学部新学科が、行政の施策や動向には沿いつつも、独自性を示すものとなっている事を確認出来たことは大きな収穫であった。

3)

① 概要（目的を含む）

全国私立大学教職課程研究連絡協議会主催「開放制教師教育の方向性を見定めよう—私学における教員養成の特色とは何か—」（開催日 11 月 30 日）への教員派遣。大阪府吹田市の関西大学千里山キャンパスで行われた同協議会に芸術学部を代表し、中村慎一学部長が参加。私立大学における開放制教員養成の現状と、今日的課題についての知見を広め、今後の学部運営に活かして行く為の参考資料とする。

② 到達目標

教員養成に対する政策が、今後大きく見直されるという可能性が示される中で、開放制教員養成制度の今後の方向性を見定めてゆくための様々な新しい情報を収集し、玉川大学芸術学部の特徴を生かした教員養成確立に活用できるようにする。

③ 活動内容

「開放制教師教育の方向性を見定めよう—私学における教員養成の特色とは何か—」というテーマのもと協議会が持たれ、その後、文科省教員養成企画室の室長補佐官や各大学の教授陣による講演、並びにシンポジウムなどが行われた。

④ 評価

本学部から中村慎一学部長が参加。開放制教員養成制度についての多くの知見を広める事が出来たが、その中でも、特に教員採用試験の採用者 55%が一般の大学出身者であり、教育学部出身の 31.5%を大きく上回るなど、数字の上からも開放制教員養成の重要性を再確認できたことは有意義であった。芸術学部の教員養成の在り方を考えて行く上で、大変重要な指針を得ることが出来た。

4)

① 概要（目的を含む）

島根大学教育開発センター主催 FD 研究会「授業の常識をひっくり返す！ 反転授業を考える」（開催日：平成 26 年 2 月 12 日）への教員派遣。島根県松江市の島根大学松江キャンパスで行われた同研究会に芸術学部を代表し、橋本順一教授が参加。今注目されている反転授業の実情を調査、研究し、芸術学部における授業改善の取り組みに関する参考とする。

② 到達目標

反転授業に関しては、我が国における研究はまだ発展途上と言わざるを得ないが、近年様々な研究例が紹介され、注目を集めている。最新の取り組みに触れ、実践者の

生の声を聞いて課題を整理し、本学部での教育活動に活かせるものなのかを検討、精査出来るようにする。

③ 活動内容

キーノートスピーチとして、東京大学の山内祐平氏が反転授業をブレンディッド・ラーニングの観点から解説し、米国の事例から反転授業のスタイルの分類化を試みた。続いて京都大学の溝上慎一氏が、アクティブ・ラーニングとの位置づけ、反転授業は情報・知識リテラシーの能力育成に大きく関連があると解説した。島根大学を中心としたポスターセッションもあり、実践の成果や課題などが具体的な事例として挙げられ、大変参考になった。また、パネルディスカッションでは実践・研究者から率直な意見を聞くことができた。

④ 評価

本学部からは橋本順一教授が参加。今回の研究会への出席で、反転授業・学習の効果や問題点を再確認することができたと同時に、まだまだ検証が必要な手法であり、これからの実践の積み重ねが必要であることを実感した。芸術学部での今後の教育活動に活かしていきたい。

(4) 調査・研究など

① 概要（目的を含む）

授業研究誌の発刊。ビジュアル・アーツ学科の科目担当教員による授業内容の紹介。科目間の連携・連動や授業改善に役立てることを目的とする。平成 23 年度に刊行したのから ISSN コードを取得した。

また、メディア・アーツ学科でも教育紀要『芸術教育研究』を発刊し、ISSN コードを取得した上で、公共図書館や大学、高等学校などに送付し、メディア・アーツ学科の教育成果を公表した。

② 到達目標

教員間で授業の内容を確認し、それぞれの担当授業の向上に反映させることを主な目標とし、実施内容の反省に基づいて、これを次年度以降の学科運営の手引きとする。

③ 活動内容

ビジュアル・アーツ学科では、学科開設の授業内容をまとめた研究誌を、年度単位でまとめて刊行している。これまで、学科の基幹科目である専門実技系の科目や研究系科目である「芸術演習 A/B」について、また、玉川大学芸術学部の特徴ある科目としての実践型プロジェクト系科目、「エキジビション」「海外特殊研究」「特別講演会」などについて、それぞれの科目担当者が、その内容をまとめている。

メディア・アーツ学科の「芸術教育研究」には、本学科のプロジェクト型授業の授業成果をまとめ、専任教員の教育理念や授業内容を教育論文・教育実践報告として公表している。本学科の教員が指導するプロジェクトは、これまでも各種メディアに取り上げられてきたが、これを論文・研究報告としてまとめることで、それぞれの教員が教育効果について再考し、外部評価を受けるための契機として位置づけた。

4 昨年度（平成 24 年度）に提案された予定・課題の達成度について

- ・芸術学部のミッションとして掲げている「芸術による社会貢献」というテーマに即した講演会を予定通り実施することができた。芸術教育の今日的な課題を検討する上で重要な指針を得る事が出来たことは、教員の意識と資質の向上に大きく役立った。
- ・今年度も昨年度同様、全ての科目において、同じフォーマットによる授業評価アンケートを、春、秋の両学期において行うことができた。併せて授業成果報告書集の発行も行い、各自の授業点検と情報の共有に努めた。
- ・高大連携授業を意義深いものとし、大学における芸術教育の目的を明らかにするため、全国高等学校美術工芸研究大会などへの参加を促してきたが、本年度も教員を 2 名派遣し、詳細な報告書を作成した。
- ・その他、学外セミナー等への教員派遣も積極的に行い、最新の情報を収集する事が出来た。アクティブ・ラーニングやルーブリックに関する研修会は特に好評で、参加者の意識がより高められた。
- ・大学 FD 委員会主催の研修会については、今年度、芸術学部からの出席者を増やす事が出来た。また、欠席者にも当日の資料等を配付し、拡大教授会において研修会参加者と大学 FD 委員がそれぞれの研修の意義と概要を報告した。大学としての FD 活動に関する様々な情報と問題意識を共有できた。

5 今後（平成 26 年度以降）の予定・課題について

- ・授業評価アンケートは全ての科目において、同じフォーマットによる調査を予定通り行うことができた。平成 26 年度以降も、春学期、秋学期、年 2 回の実施を予定している。アンケート結果の公表方法については引き続き議論を重ね、より良い方向性を見出していきたい。
- ・芸術学部ではそれぞれの授業における学習成果を相互に参観することを推奨してきた。パフォーミング・アーツ学科は青山円形劇場、YAMAHA・玉川 Music Day、メディア・アーツ学科はデジタル・プラネット Music Japan TV および相模原・町田大学コンソーシアム、ビジュアル・アーツ学科は町田市立博物館などと産学連携を進め、学内教員のみならず、学外者による授業参観を実施してきた。今後もそうした授業成果報告、公開発表会を積極的に行い、カリキュラム改革・授業改善のための環境作りを進めていきたい。
- ・年度末に専任教員と非常勤教員のコミュニケーションと教育目標の確認を目的とした研修会・親睦会を実施した。全体会では、学部の教育目標と、今後の FD 活動についてのプレゼンテーションを行い、その後、学科ごとに改善すべき点について議論した。芸術学部にも所属する専任教員と非常勤教員が一同に会することで、情報の共有を図ると共に緊密な教員連携の基礎となるコミュニケーションを深めて次年度に向けて様々な情報を共有することができた。また、こうした交流の機会をさらに広げる方向で議論を進め、専任と非常勤が一体となった教育力の充実に努めていきたい。

§ リベラルアーツ学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

本学部では①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

大学 FD 委員…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を拡大教授会にて報告する。

FD 研修会担当…学部で実施される専任教職員向けの FD 研修会についてコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

3 平成 25 年度の活動内容

(1) 初年次教育の方向性に関する研修会（ディスカッション）

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、次年度以降の 1 年次研修の具体的なプランを検討する。また、研修と連動した初年次教育そのもののあり方についても意見交換をする。

② 到達目標

次年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善する。

③ 活動内容

1 年次研修の 2 日目である平成 25 年 6 月 1 日（土）10:00～12:00 に、ザ・プリンス箱根にて実施した。参加者は 1 年生担任教員の他、主任会の教員を含めた 10 名であった。具体的には以下の各項目について検討を行った。

i) 「一年次セミナー101/102」と「リベラルアーツセミナー I / II」の有機的連携について

ii) 1 年次研修の研修先（現行：箱根）、日程と研修（フィールドワーク）内容の再検討について

両項目ともに活発なディスカッションがなされた。特に ii) については、様々な条件を考えると現状では箱根周辺が適した研修先であることが確認されたが、平成 26 年度より日程に土曜日が含まれるため、現地でのフィールドワークのあり方に考慮が必要であることが併せて確認された。

④ 評価

検討内容を実践に反映させるのは平成 26 年 4 月となるため、実質的な評価はそれ以降になるが、リベラルアーツ学部の初年次教育の要ともいえる 1 年次研修の内容に

ついて一定の問題意識を共有できたため、現時点での暫定的な目標達成はできたと考えられる。

(2) 平成 25 年度リベラルアーツ学部防災訓練

① 概要（目的を含む）

学部専任教職員の防災意識を高めると同時に、災害発生時に迅速かつ適確な対処ができるよう、必要な知識を確認し、具体的な避難手順を実践的に理解する。

② 到達目標

災害発生時の迅速かつ適確な対処ができるようになること。

③ 活動内容

平成 25 年 7 月 18 日（木）15:00～16:30、第 2 大学研究室棟にて実施した。訓練には 15 名の専任教職員および 2 名のパート職員が参加し、キャンパスセキュリティセンターによる指導の下、以下の内容が実施された。

【1 次訓練】災害発生時の流れの確認（内容は以下の通り）

- ・学生への安全確保指示
- ・非常放送設備前への教職員集合、および次段階指示の判断
- ・非常放送設備による指示周知
- ・1 次避難場所の確認及び避難経路の確認
- ・災害対策本部との連携

【2 次訓練】消防設備機器の使用訓練（内容は以下の通り）

- ・火災発生時の対応方法（内線 99 の活用）
- ・消火器使用方法（練習用水消火器による消火訓練実施）
- ・屋内消火栓使用方法

④ 評価

定量的な評価は実施していないが、訓練後に参加教員からの意見を聴取したところ、災害発生時の具体的な流れを具体的に理解できただけではなく、災害対策本部と部処との指示連絡系統の問題点を認識することができたという意見が多く聴かれた。したがって到達目標は概ね達成されたと評価できる。

(3) 2 年次フィールド研修（東日本大震災・被災地ボランティアプログラム）

① 概要（目的を含む）

「キャリアセミナー」の一環としてボランティアプログラムを導入するために、東日本大震災の被災地を代表学生と教員が視察し、現状とニーズを把握した上で、2 年次の学生が広義のキャリアを考える上で必要なボランティアプログラムを具体化する。

② 到達目標

次年度以降の 2 年次「キャリアセミナー」へ効果的なボランティアプログラムを具体化すること。

③ 活動内容

平成 25 年 9 月 14 日・15 日の 2 日間、代表学生と専任教員 6 名が陸前高田、気仙沼、女川、石巻、東松島、若林、名取の各地区を視察するとともに、現地の関係者か

ら被災地の現状とニーズについて話をうかがった。

④ 評価

参加者の話によると、被災地の人々は、震災から一定期間経過した今だからこそ様々な人に現地へ訪れてほしいと願っており、どのような形であれ学生が被災地へ赴く意義は小さくないとのことであった。まだ試行段階であるため、本来的な評価はできないものの、被災地の現状とニーズをより多角的に把握できたことは高く評価されてよいと思われる。

(4) 平成 25 年度リベラルアーツ学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

Tamagawa Vision 2020 に対応した学部の将来構想（特に学科編成と教育カリキュラム）について、専任教職員が情報を共有するとともに、カリキュラム、教育方法、到達目標などの検討を行う。

② 到達目標

学科編成の方向性と新カリキュラムの進め方を教職員が確認し、到達目標や指導方法等の大まかなあり方について認識を共有すること。

③ 活動内容

平成 26 年 2 月 20 日・21 日の 2 日間、箱根の湯本富士屋ホテルを会場とし、専任教職員約 20 名（次年度からの新任教員を含む）による研修会が実施された。主に以下の項目について、参加者による報告・質疑応答・ディスカッションが行われた。

【2 月 20 日】学部全体で取り組む「玉川学」プログラムについて

- ・他大学・他地域で展開されている地域学について
- ・「玉川学」の教育への還元方針について

【2 月 21 日】Tamagawa Vision 2020 に対応した学部の方向性について

- ・学部、学科編成・メジャー・カリキュラムの再検討
- ・開講単位数の削減
- ・教職課程のあり方

④ 評価

Tamagawa Vision 2020 に対応した学部・カリキュラムの方向性については、現状からの移行にともなう様々な問題点について活発な議論が行われ、特に新しい学科編成と本学部の存立基盤である 7 メジャー制や「広く・深く学ぶ」カリキュラムの維持をどのように成立させるかということに関しては参加者全員の認識が共有されたと思われる。それに対する具体的な対策案はまとまるに至らなかったものの、2 学科編成に移行したほうが良いのではないかという方針が共有されたことは一定以上の評価に値するのではないだろうか。

(5) 1 年生を対象とした本学部入学プロセス等に関する面接調査

① 概要（目的を含む）

1 年生の入学プロセス等を個別に自由面接調査法により把握し、今後の受験者獲得に資するニーズ等を明らかにすることを目的とする。今年度はパイロット調査として、

(1年担任：小山雄一郎准教授)を中心に実査を行った。

② 到達目標

1年生の入学プロセス等の大まかな傾向を把握することにより、受験者獲得に資するようなカリキュラム改善のヒントを得ること。

③ 活動内容

平成25年10月から平成26年2月にかけて、1年生を中心に、学生1人1人に対して自由面接調査を行い、本学部の選択・入学に関するプロセスをたずねた。その結果を記録した上で、そこに見られる大まかな傾向を分析した。主要な知見は以下の通りである。

- ・概数ではあるが、概ね3分の1の学生が教職課程(中学・高校の英語または国語)を目的として本学部を選択しており、残り3分の2の学生が自身の「やりたいこと」を決めきれないことを理由に本学部を選択していた。
- ・一般入試による入学生の多くは、本来の志望校に合格しなかったために本学部へ入学していたが、偏差値の高い他大学にも合格しながら、教育理念やキャンパス環境に魅力を感じ、敢えて本学部へ入学した者も若干名見られた。
- ・推薦入試およびAO入試による入学生の多くが、本学の教育理念等をよく知る家族・親族、教員等の薦めがきっかけとなり、応募するに至ったとのことであった。

④ 評価

以上の結果からは、i)教職課程プログラム、ii)充実した学際的プログラム、iii)全人教育を中心とした独自の教育理念に力点を置いたプログラム、という3点が、本学部における受験者獲得のために重要ではないかと推察される。パイロット調査ではあるが、これらを把握できたことにより、目標は概ね達成されたといえる。

(6) 学生による授業評価アンケート (Bb を利用)

① 概要 (目的を含む)

学部教員がよりよい授業を展開するために、学部US科目・学部導入科目・発展科目を中心とした科目群に関する学生の意識・行動をアンケート形式(自由記述を含む)で把握する。

② 到達目標

アンケート結果を鵜呑みにするのではなく、客観的に有用と思われる結果を教員が参考とし、それを今後の授業改善へ具体的に活かすこと。

③ 活動内容

平成25年度秋学期終了後、US科目・学部コア科目・導入科目・発展科目の主要な履修生であり、かつ新カリキュラムの適用対象である1年生を対象とし、40問程度の設問に対して5件法および自由記述にて回答してもらった。実査はBbを通じて実施され、有効回答率は約35%(平成26年2月現在)であった。

④ 評価

Bbへの掲示および周知が遅れたため、回答率が低調であったことは反省しなければならない。以下、結果を概略的かつ抜粋して評価する。

メジャー選択のための重要基礎科目である「リベラルアーツ入門」について、「オム

ニバス形式の授業は満足した」という命題に対しては「あてはまる」が約 30%、「どちらかといえばあてはまる」が約 40%であった。これは昨年度の結果（前者：30.1%／後者：39.6%）とほぼ同様の良好な結果であったといえる。

メジャー選択をする上で重要な導入科目（100 番台科目）に関しては、「授業には意欲的にとりくんだ」という命題に対して「あてはまる」が約 43%、「どちらかといえばあてはまる」が約 41%となっており、また「授業全体についてよく理解できた」という命題に対しては「あてはまる」が約 21%、「どちらかといえばあてはまる」が約 60%であった。いずれも肯定傾向の回答が合計で 80%を超えており、学生たちがメジャーを真剣に選択しようとしている様子が推察されると同時に、各メジャーの導入科目において学生が理解しやすい授業が展開されていることが読み取れる。

4 昨年度（平成 24 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案された予定・課題は以下の通りであった。

- ①これまでと同様、引き続き FD への意識をより高めるとともに、ディスカッションを通じた相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図る。加えて、「研究力」の向上を目指した取り組みもスタートさせる。
- ②新カリキュラムおよび Tamagawa Vision 2020 を念頭に置いた FD 活動の学部内における位置づけをよりいっそう明確にし、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを具体的に構築していく。
- ③「ブリッジ講座」の運営を通じてリベラルアーツ教育における分野間連携を具体的に実践するとともに、引き続きその他の分野間連携プランを、教員相互の提案・議論を通じて検討していく。
- ④新カリキュラムの運営において、引き続き学生の学修状況（たとえば予習・復習の実践状況）や理解度を把握し、その結果を本学部における学士課程教育の質保証へとフィードバックできるよう努力する。

①の「教育力」に関する面については、FD 研修会、視察会、防災訓練の実施や拡大教授会におけるディスカッション、および日常的な教員相互のブリーフィングなどによって概ね実践されてきたと評価できるが、「研究力」の向上に関しては具体的な取り組みをスタートさせることができなかったため、引き続き今後の課題としたい。

②に関しては、FD 研修会において問題認識の共有をすることはできたが、やはり本年度も仕組みの構築にまでは至らなかったため、こちらも引き続きの課題とする。

③については「玉川学」の推進とその成果を「ブリッジ講座」へとフィードバックすることがスタートしたが、引き続き分野間連携のあり方を模索する必要がある。

④に関しては、学部カリキュラム改正と全学のそれに年度のずれがあるため、学年ごとに異なる新カリキュラムへ教員が適応することに時間と労力をかけざるを得ず、学生の学修状況の把握にまで手がまわらなかったというのが実情である。この点についても継続課題としたい。

5 今後（平成 26 年度以降）の予定・課題について

- ①1 学部 2 学科編成への移行の是非とそれに伴うカリキュラムの検討を行う。
- ②これまでと同様、引き続き FD への意識をより高めるとともに、ディスカッションを通じた相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図る。また、次年度こそ「研究力」の向上を目指した何らかの取り組みを少しずつでもスタートさせる。
- ③新カリキュラムおよび Tamagawa Vision 2020 を念頭に置いた FD 活動を続けるとともに、学部・学科・メジャーの再検討を引き続き進め、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かすべく、具体的な仕組みを構築していく。
- ④「玉川学」および「ブリッジ講座」の運営を通じてリベラルアーツ教育における分野間連携を具体的に実践するとともに、引き続きその他の分野間連携プランを、教員相互の提案・議論を通じて検討していく。
- ⑤学年ごとに異なるカリキュラムの運営において、学生の学修状況（たとえば予習・復習の実践状況）や理解度を把握し、その結果を本学部における学士課程教育の質保証へとフィードバックできるよう引き続き努力する。

§ 観光学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

観光学部では、現在における観光の意義と役割、現状と課題を的確に理解し、適切な情報収集とその分析および異文化に対する理解を基礎に、高度な英語運用力を駆使してグローバル時代の観光ビジネス、地域活性化に貢献できる人材を養成する。

目標とする人材育成にあたり、平成 25 年度に新設された観光学部の初年度 FD では、教員全員が観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識を共有することを目標とする。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

観光学部長、観光学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって FD 活動を実施する。学部の担当教員と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会・ワークショップの運営にあたる。

3 平成 25 年度の活動内容

(1) 講演会 I

① 概要（目的を含む）

平成 25 年 8 月 15 日（木）14 時 30 分～16 時 00 分

学生の留学先であるメルボルンに関する理解を深めるため、「メルボルンの現状」をテーマとして、観光学部の玉木栄一教授から講演いただいた。

② 到達目標

留学する学生に対して、メルボルンに関する一定の見識を示せるようになる。

③ 活動内容

1 時間半にわたり、玉木栄一教授に講演いただいた。玉木教授が長年にわたって滞在されたメルボルンについて、その歴史、風習、および、日本との関係など、数々の経験に裏打ちされた内容で多岐にわたった。

④ 評価

メルボルンに留まらず、オーストラリアに留学する学生が知っておかなければならない歴史的背景などを確認するとともに、実際に現地で滞在してなければ知りえない貴重な現状を知ることができた。観光学部の教員であっても、こうした現地の現状を知らない教員が多いわけであるから、折をみて学生らにこれら情報を提供し、さらには留学直前にも学生全体にこうした事実を改めて知ってもらう機会を設けなければならぬだろう。

(2) 観光学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

平成 25 年 11 月 28 日（木）17 時 00 分～17 時 30 分

9 月上旬にかけて観光学部教員によるメルボルン留学提携校の現地調査が実施された。本 FD 研修会の目的は、各提携校を担当する教員から報告された調査結果を検討することで、現地の現状の把握し、そして、その問題点を浮き彫りにすることである。

② 到達目標

- ・ 留学する学生に対して、メルボルンに関する一定の見識を示せるようになる
- ・ 現地メルボルンの現状を把握する
- ・ 留学にあたって想定される問題点を明らかにする

③ 活動内容

益田、鈴木、玉木、實川、秋山の5名による現地調査結果を各教員が下記の通り報告した。

益田誠也教授

9月2日から7日まで、鈴木教授、玉木教授、秋山准教授、實川准教授、国際教育センター 副センター長の松本准教授とメルボルンへにて現地調査を行った。目的はビクトリア州政府の貿易商担当者の変更に伴う表敬訪問とインターンシップに関するビクトリア州政府への依頼、および3大学との教務日程の摺合せ、インターンシップに関するインターンシップ先開発依頼、その他である。各大学訪問時に大学施設、アコモデーション見学、語学学校での実際のクラスへ参加することができ、英語運用力レベル、教育方法を理解できた。語学学校の生徒は、多民族、多宗教、多文化が混在して、学生の資質もかなり異なり、玉川の学生が1年間、他人に影響されることなく、自己研鑽して無事に帰ってこられるのか、負のイメージも持った。学生に、大学がすべて用意する修学旅行ではなく、なんでも自分一人で対処していかなければならないことを自覚させる教育をする必要があると強く感じた。

鈴木シルヴィ教授

休みも取らずに働きすぎてしまう日本人や、バカンスに夢中で仕事に対して少しルーズなフランス人と比較して、オーストラリア人は仕事と休暇のバランスをうまくとっている印象を受けた。彼らは仕事に強い責任感を持つ一方で、休みもきちんと取る。そのことが彼らの勤務態度に余裕や人間味を持たせ、卒にはまらない柔軟な対応を可能にしている。その結果客に対して積極的な気配りをし、親切さを感じさせる接客態度となっている。日本人はマニュアル通りの対応をすることが、ホスピタリティにおいて重要だと考えてしまいがちである。そこで、オーストラリアでの留学の経験は観光学部の学生に現場判断での対応の重要性を実感させる良い機会となるだろう。

玉木栄一教授

スインバーン工科大学は、1908年設立から100年以上、理工系の技術者養成に貢献してきたが、近年ではビジネスや文化・芸術分野での人材育成にも実績を上げている。総学生数35,000人の内、22,000人が学ぶメインキャンパスは、メルボルン郊外の高級住宅地、ツーラックに隣接するホーソン地区にある。メルボルンの中心から電車で約15分、キャンパス内に駅がある。駅前商店街を抜けると中庭を囲んで、大学の事務所、学部校舎や研究棟、カフェやレストランなどの建物があり、その後方には、カラフルなデザインの図書館や様々な施設が建ち並んでいる。理工系の学生が多いことから、24時間利用可能な図書館や学習室など、IT環境は、充実している。留学生向けの英語コースは、このキャンパスで開講され、約700人の学生が学んでいる。出身国別では、ベトナム、ブラジル、サウジアラビア、中国からの学

生が多く、日本人学生は、約 3%と少ない。大学全体で、海外からの留学生数は、22%を占め、キャンパス内は国際色豊か、異文化理解を深め、国際人としての素養を養うには最適な環境である。

實川真理子准教授

オーストラリアの高等教育制度では、大学 (University) は 39 校と日本(783 校)の 20 分の 1 しかない。高校から直接大学に進学する者が多数の日本とは異なり、Pathways と呼ばれる教育機関を経る者が多い。大学は、入学条件として学力 (Academic Requirement) と語学力(Language Requirement)の客観的尺度による基準を定めている。Study Abroad という学位を目的としない留学生の学士課程科目履修も、この基準を満たさなければ受講できない。GPA2.5 前後、IELTS6 または 6.5 が多い。

学力等の不足により学士課程への入学が認められない場合、Foundation Studies の Diploma コース等で学修後、修了レベルによって学士課程への編入学が認められる。

Diploma コースは、入学当初の授業は低いレベルから始めるが、少人数で密度濃く多めのコンタクトアワーを確保することで、短期間に学力を伸ばす方法をとっており、1 年間の学修を十分な達成度(60-70%)で終えたものは、大学 2 年次への編入を認めている。この場合、Diploma コースの科目内容は学士課程科目と同等とみなされる。(University 以外が Bachelor コースを設置しているケースが見られたので University の職員に尋ねたところ、「あまりいいことだとは思わない」という返答だった。グレーゾーンのような。)

語学力の不足の場合は、語学研修 (ELICOS, English Language Intensive Courses for Overseas Students)で、所定のレベルを修了すると、学士課程、または、Foundation Studies への入学・参加が認められる。所定のレベルとは、English for Academic Purpose の IELTS6 または 6.5 レベルを、達成度 60%以上で修了することをいう。たとえ学士課程科目履修予定でも、ELICOS の所定コースで 60%をとれなければ、ELICOS に残留して英語力の向上を図るか、あるいは、より低い Language Requirement を課している Diploma コース等へ進む。

本学の学生は、各大学の Study Abroad プログラムへの参加を考えているが、学力・語学力・学生の希望、また学事日程の差異により Study Abroad で 2 学期の履修が不可能な大学があることを考慮して、Foundation Studies も含む履修パターンを検討する必要がある。

秋山綾准教授

留学先の 1 つであるビクトリア大学はビクトリア州メルボルンにある公立大学であり、4 つのキャンパスを有する。英語教育のためのキャンパス (City Flinders Campus) は、メルボルンの中心駅 (Flinders 駅) のすぐそばにあり、町中で海外の刺激的な雰囲気に触れながら、生きた英語を学ぶことができる。また、Footscray park campus はビクトリア大学で最も大きく、最も歴史あるキャンパスであり、学生生活に必要なすべての施設が整っている。Flinders 駅から電車で 20 分程度である。図書館やスポーツ施設が充実 (スポーツ関連の学科あり) しており、大学内の全施設は、学生証の提示により使用することが可能である。図書館には留学生のための施設や Student Rover (図書館の案内学生) がおり、学習のサポートが充実し

ている。

ビクトリア州メルボルンには多くの外国人が居住している。町中を歩くと様々な文化に出会うことができ、これらの融合が町の魅力の1つとなっている。多くの外国人が共生する環境は、世界中から多くの移民を受け入れてきた歴史から形成されてきたといえよう。この移民の歴史を多くの人々に伝えるため、町の中心地には「移民博物館」がある。

ここでは時代ごとにどのような人々が移民としてメルボルンにやってきたか、また、どのようにやってきたかが、人々が使用していた当時の日常品の展示と丁寧な説明により解説されている。この博物館に訪れることはメルボルンについての多くの知識が得られ、多様な文化が融合する社会を深く理解するための一助となるであろう。

④ 評価

当初予定していた分量（300字程度）に収まらずに分量を大きく超えた報告書がほとんどであった。それだけ、現地調査が充実していたことがうかがえる。また、各担当教員による報告内容の中から、特にカリキュラムについて検討すべき点がいくつかあることがわかった。これら検討事項は、その後の学部内名称が変更（語学研修→ELICOS）されるなど、現地調査結果が着実に成果に結びついている。

（3）講演会Ⅱ

① 概要（目的を含む）

平成25年11月28日（木）17時30分～18時30分

「就活実績と高千穂ゼミ」と題して、観光学部の高千穂安長教授から講演いただいた。本講演会の目的は、就職率100%を誇るゼミ運営のノウハウを教授いただき、今後の観光学部全体のゼミ運営に資することである。

② 到達目標

成功したゼミ運営の一例を今後のゼミ運営に生かせるようになる

③ 活動内容

質疑応答も含め、下記の内容に沿って約1時間半もの間講演いただいた。

- i. 社会が学生に期待すること
- ii. ゼミに学生が期待すること
- iii. ゼミ生の問題
- iv. 高千穂ゼミの進路決定状況
- v. 高千穂ゼミの取組
- vi. 入ゼミの葉の内容
- vii. ゼミ運営で特に留意していること

④ 評価

観光学部の前身である観光経営学科の就職率がなぜ突出して高いのか。その理由の一つに、就職率100%を誇るゼミ運営をされていた高千穂教授が挙げられる。本講演会では、就職率100%につながるゼミ運営について、そのノウハウを講演いただき、拝聴した観光学部教員にとって非常に有用な内容であったのではないだろうか。事実、

講演終了後の質疑応答では数多くの質問が寄せられ、教員の関心の高さが伺えた。

(4) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

観光学部観光学科の科目において、授業改善を目的とした授業評価アンケートを実施した。今年度は春semester、および、秋semesterに実施している。

② 到達目標

学生の学修達成度を測り、改善点を踏まえて今後の授業運営に資すること。

③ 活動内容

観光学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。データの集計結果は科目担当教員に配付し、活用している。

④ 評価

観光学部初年度授業評価アンケートの結果は下記の通りである。経年比較はできないが、本年度の結果は次年度の参考数値としたい。

【春semester授業評価アンケート全体結果】

分野	設 問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	2.7	5.9%	7.0%	40.6%	42.8%	3.7%	1
	2 授業以外によく予習復習した	2.5	3.7%	4.3%	34.2%	50.3%	7.5%	1
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.0	32.4%	40.4%	25.0%	1.1%	1.1%	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.3	12.3%	26.2%	46.5%	10.7%	4.3%	1
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	28.2%	52.1%	17.6%	2.1%	0.0%	0
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	35.6%	47.9%	12.8%	3.2%	0.5%	0
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	34.9%	40.3%	22.6%	2.2%	0.0%	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	25.5%	45.2%	25.0%	3.7%	0.5%	0
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	26.6%	44.1%	26.6%	2.1%	0.5%	0
	10 基本的知識が得られた。	4.2	38.3%	50.0%	9.0%	2.7%	0.0%	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	25.0%	42.6%	29.3%	2.7%	0.5%	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	23.4%	39.4%	32.4%	4.3%	0.5%	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	22.5%	39.6%	33.2%	3.7%	1.1%	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	25.5%	46.3%	24.5%	3.2%	0.5%	0
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	31.9%	49.5%	16.5%	2.1%	0.0%	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	25.5%	47.9%	22.9%	3.2%	0.5%	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	25.5%	46.3%	26.1%	1.6%	0.5%	0
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	44.9%	36.4%	15.5%	3.2%	0.0%	1
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	39.0%	37.4%	17.6%	5.9%	0.0%	1

【秋セメスター授業評価アンケート全体結果】

分野	設 問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.7	5.0%	11.4%	40.9%	35.6%	7.0%	0
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.6	4.7%	9.1%	35.4%	40.4%	10.4%	1
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.8	23.8%	43.0%	25.5%	5.7%	2.0%	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.2	8.8%	23.6%	48.3%	12.5%	6.8%	2
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	25.6%	47.1%	22.9%	4.4%	0.0%	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	27.4%	46.3%	21.6%	4.7%	0.0%	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	28.3%	42.8%	25.9%	3.0%	0.0%	1
IV	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	21.5%	39.6%	31.5%	6.0%	1.3%	0
	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.8	19.2%	42.4%	35.0%	3.0%	0.3%	1
	10 基本的知識が得られた。	4.1	34.3%	41.1%	21.2%	3.4%	0.0%	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.7	19.5%	40.3%	34.9%	4.7%	0.7%	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	16.8%	39.6%	35.2%	6.7%	1.7%	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	17.8%	38.3%	36.6%	7.4%	0.0%	0
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	19.8%	42.3%	31.9%	5.7%	0.3%	0
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	28.2%	40.9%	26.8%	4.0%	0.0%	0
	16 授業全体を通して、授業内容の	3.8	24.2%	39.9%	30.9%	5.0%	0.0%	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	23.6%	34.8%	34.1%	6.8%	0.7%	2
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	39.4%	34.3%	20.2%	5.7%	0.3%	1
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.0	38.4%	30.6%	23.6%	6.1%	1.3%	1

(5) 教職員相互の授業公開と参観

① 概要 (目的・到達目標を含む)

教員相互で授業を参観し、各教員の教授法、教授内容について授業改善を行う。

② 活動内容

秋セメスターに2名の教員の協力のもと、参観授業を行い、授業改善につながるよう担当教員と参加教員による振り返りを行った。

③ 評価

参観できた教員が少なかったため、次年度は参観教員数を増やせるよう検討の余地がある。

4 今後(平成26年度以降)の予定・課題について

平成25年度と同様に、学部FD研修会、講演会、参観授業、授業評価アンケートを実施する。特に、講演会は帰国した学生も対象となる就職活動4月開始状況を鑑みて、専門の講師によるレクチャーとなる。

また、次年度は観光学部の学生が留学する初年度であり、実際に様々な問題が生じるであろうから、発生した問題に対して種々検討されることが予想される。実のところ、講演会Ⅱは年度当初には予定されていなかったFDであり、臨機に開催したFDであったが、結果的にその有用性は極めて高かった。したがって、完成年度を迎えていない観光学部では、学部全体として共有すべき事案については、臨機にFDの一環として扱うこともあろう。

今年度は新設学部として初年度FDであったが、目的として掲げられていた観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識の共有については、ある程度達成されたと思われる。完成年度までは、紋切型のFDになることなく、流動性を生かしつつ、有用性の高いFDを実施していかなければならない。

3. 教師教育リサーチセンターの活動

1 FD・SD 活動への取り組み理念

本センターは、教員養成課程を運営するため、大学附置機関として設置された。主な業務内容としては、教職課程における学生支援と、教職に関する研究活動支援がある。研究活動支援の中には、教員養成における教職課程 FD・SD 研修も含まれており、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

2 教師教育リサーチセンターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

センター長、事務長、課長を中心に FD・SD 活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務を担当している。

3 平成 25 年度の活動内容

(1) 教員養成フォーラム

① 概要（目的を含む）

教師教育リサーチセンター開設 1 周年を記念し、「期待される教師と今後の教員養成」をメインテーマとし、フォーラムを開催した。本学教職員をはじめ、近隣教育委員会、全私教協加盟大学、教育実習先、学会関係者等、教師教育・教員養成に関わる多くの方々に広報を行った。

教員養成の現在と今後の課題や、教師に求められる能力等、講演やシンポジウムを通して、今後の教員養成の在り方について、多くの方々と共に考える機会とした。

② 到達目標

200 名以上の出席者を目標に掲げた。

③ 活動内容

平成 25 年 10 月 20 日（日）13:00～17:00 於：玉川学園講堂

テーマ：『期待される教師と今後の教員養成』

【プログラム】

1. 「開会挨拶」小原芳明（玉川大学学長）
2. 講演Ⅰ「教員養成の現在と今後の課題」
義家弘介（衆議院議員、前文部科学大臣政務官）
3. 講演Ⅱ「初等中等教育を担う教員養成に対する期待」
高口 努（文部科学省初等中等教育局教職員課長）
4. ショートレクチャー「期待される教師力・学校力」
八尾坂修（九州大学大学院教授、本学教師教育リサーチセンター客員教授）
5. シンポジウム「これからの学校と学び続ける教師」
岡田優子（横浜市教育長）
藤田弓子（女優）
田中克義（川崎市立南菅小学校総括教諭）
森山賢一（本学教師教育リサーチセンター長、教職大学院・教育学部教授）
八尾坂修：コーディネーター

④ 評価

当日は約 200 名の出席者となり、盛況に終了し、目標達成となった。

(2) 玉川教育フォーラム 2013

① 概要（目的を含む）

実践的指導力の養成に関するフォーラムを開催した。本学教職員をはじめ、近隣教育委員会、全私教協加盟大学、教育実習先、学会関係者等、教師教育・教員養成に関わる多くの方々に広報を行った。

「理数教育の充実」をテーマに、具体的な実践的指導力の養成に関する内容とし、特に、理科、算数・数学について3つの分科会では、現職教員、大学教員が実践例や効果的な授業実施内容を学ぶ機会とした。

② 到達目標

100名以上の出席者を目標に掲げた。

③ 活動内容

平成25年12月7日（土）13:00～16:00 於：玉川大学大学研究室棟

【プログラム】

1. 「開会挨拶」小原芳明（玉川大学学長）
2. 「フォーラム趣旨と玉川大学の取り組み」
森山賢一（本学教師教育リサーチセンター長、教職大学院・教育学部教授）
3. 講演「品川区の教育改革を振り返って」
若月秀夫（一般財団法人学校教育研究所代表理事、
政策研究大学院大学客員教授、本学教師教育リサーチセンター客員教授）
4. 分科会
 - 第1分科会「理科教育における直接経験と間接経験
ーあなたは直接経験と間接経験のどちらを支持しますかー」
相場博明（慶應義塾幼稚舎教諭、本学教育学部非常勤講師）
 - 第2分科会「理科学習の課題とその対策 ー子どもも教師も使いやすい
理科室（小学校）の改善を例にしてー」
田島 操（本学教師教育リサーチセンター客員教授）
 - 第3分科会「算数・数学の学習指導の課題 ー子どもが考え判断し
表現する学習指導の工夫とその実践交流を中心としてー」
下田照雄（本学教師教育リサーチセンター客員教授）

④ 評価

当日は約100名の出席者となり、分科会においても活発な意見交換もでき、目標達成となった。

(3) 平成25年度 教職課程FD・SD研修会

① 概要（目的を含む）

各学部長、学科主任、教務主任、教務担当、教職担当は原則出席とし、関係部処職員にも出席を促した。九州大学大学院教授、本学教師教育リサーチセンター客員教授でもある八尾坂修先生に講師を依頼し、以下の内容（目的）に基づく研修会とした。

② 到達目標

以下活動内容の「内容（目的）」に示されているように、教員養成大学の課題や、今後の改革の方向性についての共通認識を持つ。

③ 活動内容

日 時：平成26年3月3日（月）15:00～16:30

場 所：大学 1 号館 401 教室

対 象：全学専任教職員

内 容（目的）：平成 25 年 10 月中央教育審議会「大学院段階の教員養成の改革と充実等について」の報告公表、平成 25 年 12 月「教員免許更新制度の改善について（中間取りまとめ）」の提示がなされた。これらをふまえて、教員の資質能力の向上に係る、教員養成大学の改革と充実は、緊急かつ重要な課題であり、また、大学院段階の教員養成、新たな教員免許更新制度の改善を含めた改革は、養成側、採用側の課題であることについて、共通認識を持つ。

【プログラム】

1. 挨拶 森山賢一（教師教育リサーチセンター長）

2. 講 演 「教員養成改革の現状と課題」

八尾坂修（九州大学大学院教授、本学教師教育リサーチセンター客員教授）

④ 評価

八尾坂先生より、中央教育審議会等が公表・提示した内容について、具体的な解釈に関するお話頂いた。教員養成側としての大学の使命や、採用側である教育委員会との連携の重要性について、大学教員、職員としてのそれぞれの立場で、理解を深めることができた。

4 昨年度（平成 25 年度）に提案された予定・課題の達成度について

平成 25 年度は教職課程 FD・SD 研修会を 2 回行う予定で計画した。実際には、『教員養成フォーラム』、『玉川教育フォーラム』と 2 回のフォーラムを実施し、フォーラムに FD・SD 研修的要素を組み込む形としたことで、教職課程 FD・SD 研修会は 1 回だけの実施とした。結果的には 2 回分の教職課程 FD・SD 研修会を行った形としたため計画は達成した。

5 今後（平成 26 年度以降）の予定・課題について

創立 85 周年記念「教員養成フォーラム」、および「教職課程 FD・SD 研修会」1 回を開催するように計画したい。

Ⅱ 教員研修

新任教員研修会

平成26年度採用の新任教員(助教以上)に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は平成14年度より開始されたもので、12回目の開催となる。参加者12名で、2日間の日程で行われた。

日 時:平成26年3月5日(水) 10:00～17:20 *18:00より、懇親会開催
3月6日(木) 10:00～15:30

場 所:教学事務棟3F会議室

対 象:平成26年度採用の助教以上の新任教員

研修目的:・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。

・専任教員としての業務に必要な知識を得る。

到達目標:・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。

・専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

(1) 研修プログラム内容

1日目:3月5日(水)

10:00	開始/研修説明	学士課程教育センター
10:05	開催にあたって	小原芳明 理事長
10:25	新任教員自己紹介	学士課程教育センター
10:40	講演「玉川大学の教育」	高橋貞雄 高等教育担当理事
12:00	昼食会	
13:00	キャンパス・ツアー	人事部
14:20	休憩	
14:30	ICTを活用した教育 学内システム利用について	eエデュケーションセンター
15:50	Notes システムと Notes 掲示板の活用	総務部情報システム課
16:10	玉川学園の個人情報保護方針について	教育企画部教育環境コンプライアンス課
16:40	質疑応答/翌日の予定説明	学士課程教育センター
16:50	キャンパス・カード用写真撮影	DTP制作課
17:20	終了(一時解散)	
18:00	懇親会	大学FD委員会
21:00	終了	

2日目：3月6日（木）

10:00	本日の研修説明	学士課程教育センター
10:10	教学事項 ・玉川学園の組織機構／玉川大学の概要 ・各種運営担当、担任業務、教務指導・学生指導 ・年間授業計画 ・学則・規程等（授業、休講、補講、試験、成績等） ・教学事務手続要領（研究費、出張(国内外)等）	教学部 教務課/授業運営課/学務課
11:30	大学1年生入学時アンケートについて(報告) アカデミック・ポートフォリオについて	学士課程教育センター
11:40	生活上の学生指導について	学生センター
12:00	昼 食	
13:00	講演「玉川大学で働くということ」	菊池重雄 教学部長
14:40	研究者情報システムについて	教学部教務課
15:00	質疑応答／まとめ	学士課程教育センター
15:30	終了	

(2) 配付資料・参考資料

資料No.	資料タイトル	担当部処
なし	平成26年度新任教員研修会<研修プログラム>	人事部研修センター
	平成26年度新任教員研修会 出席者一覧	
	玉川学園案内図（キャンパスツアールート）	
	平成25年度新任教員研修会 キャンパス・ツアー資料	
	大学教員の勤務について	人事部人事課
	新しく加入者になられる皆さんへ（共済事業）	
	WELBOX 会員の皆様へ	
	大学1年生 入学時アンケートについて（報告）	学士課程教育センター
	図書館利用ガイド 教員用（冊子）	図書館運用課
	玉川学園 玉川大学 総合パンフレット	キャンパスインフォメーションセンター
	図書目録	玉川大学出版部
1	「玉川大学の教育」	高橋 貞雄 理事
2	ICTを活用した教育	eエデュケーションセンター
	1-1 新規 学内 LAN 利用アカウント申請書	
	e-Education NewsLetter 2013Vol.2	
	学内システム利用ガイド（教員用）	

3	「コンプライアンスとは何か」	教育企画部 教育環境コンプライアンス課
	学校法人玉川学園コンプライアンステキストブック	
	学校法人玉川学園個人情報保護テキストブック	
	学校法人玉川学園個人情報保護マネジメントシステムガイドブック	
	玉川学園・玉川大学ソーシャルメディアの利用についてのガイドライン	
	よくわかる個人情報保護のしくみ《改訂版》	
	写「文部科学省所轄事業分野における個人情報保護に関するガイドライン」(冊子)	
	情報機器(モバイルシステム)セキュリティ対策ガイド	
	玉川学園における環境への取り組み	
4	学校法人玉川学園組織機構 玉川大学の概要 担当業務等について	教学部教務課
	学校法人玉川学園組織事務分掌細則	
	学校法人玉川学園 組織機構図(平成26年4月1日施行案)	
	在籍学生数一覧(学年別、共学) 2013.5.1	
	教職員在籍者数 平成25年5月1日	
	学部運営組織	
	ご着任にあたって	教学部学務課
	各種事務手続き【教学 Information】について	
	平成26年度 個人研究費説明会について	
	平成26年度 新任教員研修会 教学事項【授業運営課】	
5	教職員のための学生支援要項(冊子)	学生センター
	2013 Student Advisory Service	
	2013 ハラスメントの防止	
6	「玉川大学で働くということ」	菊池 重雄 教学部長
	大学・短大でFDに携わる人のためのFDマップと利用ガイドライン	
7	資料1 研究者情報システム ReaP 教員用マニュアル(説明会用抜粋)	教学部教務課
	資料2 研究者情報システム ReaP 管理者・教員共通マニュアル(説明会用抜粋)	
事前 送付	小原國芳『全人教育論』	玉川大学出版部
	玉川学園編『愛吟集』	玉川大学出版部
	「全人2014年2月号」	玉川大学出版部

(3) 実施の成果

本学における教育について、昨年度に引き続き、高等教育のコンテキストから参加者に理解してもらえようような講演の時間を設けた。「玉川大学の教育」そして「玉川大学で働くということ」という2つの講演により、専任教員としての業務に必要な教学事項や学生指導、個人情報保護に関する事項などとあわせ、大学やそこで働く教員に期待されていることが何かを明確に伝えることができた。研修会の運営にあたっては、全体を通して受講者が参加しやすく過ごしやすい空間・環境を整えることを心がけた。

研修内容・資料・講師の説明については、報告書の回答者全員が、「とても充実していた」あるいは「充実していた」と回答している。

今回の研修のよかった点についてのコメントは、次のとおりである：

- ① 新規採用の先生方とお話しが出来たことが良かった。
- ② 玉川学園・大学に関する理解が深まりました。また Blackboard の使い方など、実用的な講義が役に立ちました。
- ③ 覚えるべき事柄について、知ることができた。
- ④ 他大学出身の者としては、玉川大学の教育精神から様々な業務、手続きについて知ることができ、大変貴重な時間となった。
- ⑤ 建学の理念から具体的な達成方法までを示していただき、勉強になりました。
- ⑥ 玉川大学の概要について、効率よく知ることができた。
- ⑦ 玉川大学の理念・目的等を学ぶことができて、一員としての自覚と責任を感じることができた。
- ⑧ 玉川大学のめざす教育の講義はわかりやすく、インパクトをもって理解できました。Web 画面を示して説明のあった学務課のレクは実用的でした。
- ⑨ 玉川大学の理念にはじまり、仕事の概略を理解できた。
- ⑩ 学園の歴史や経過を学ぶ良い機会であった。学生との関わり方をイメージできて良かった。
- ⑪ 玉川大学の歴史、最近の動き、今後目指す方向がまとまってわかった。
- ⑫ FD、Academic portfolio、campus tour、 Tamagawa's education and history

その上で、改善希望として、次のようなコメントがあった：

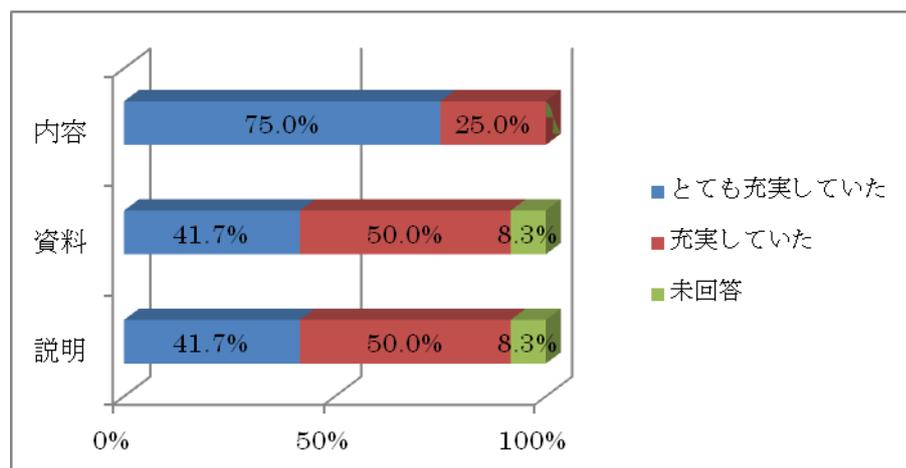
- ① 専門的な用語が多くて理解に苦勞する場面があった(特にカタカナを使った用語)。用語解説などの一覧資料があると便利と思う。
- ② 1日目の昼食会は夜の会もあるので、2日目と同様の仕様が良いと思います。休憩時間が確保されるので、午後の研修の効果がのぞめるように思います。
- ③ 資料が多く、どれが重要なものなのか分かりづらかった。
- ④ 教学部の教務課の説明が資料に即しておらずわかりにくかった。
教学部の説明事項は関心の高いところだが、時間を余らせるようなことになって残念。

また、要望・感想として、次のようなコメントがあった：

- ① 昼食時、懇親会でいろいろな方々とお話ができ、大変有意義な時間を過ごしました。また、菊池先生のお話は、これからの教員生活に対して、大きな意識改革をしていただきました。
- ② ランチや懇親会の場があり、他の先生とコミュニケーションがとれたのが非常に良かった。
- ③ 研修が丁寧に組まれていて感謝します。夜の会は玉川のメンバーになったという実感を得ることができました。
- ④ 教育を大学全体として大切にされていることを知り、4月からの気構えをもつことができました。2日間、本当にありがとうございました。
- ⑤ 学生の問題行動・教員側が気をつけるべき点をより具体例を示して教えてほしい。

教学部長のお話を教学部の説明より前にしていただいた方がよかったように思う。

＜報告書データ集計 —内容、資料、説明について—＞



これらの意見から、本研修会の目的・到達目標は達成できていると評価できる。同時に、本研修会が新任の先生方との教育・研究活動に向けた良好な関係構築に役立つものであったと考えられる。

次年度の開催に向け、引き続き、研修内容や提示資料の工夫と質の向上に努めたい。

以上

Ⅲ コア科目およびユニバーシティ・スタンダード科目の 「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要

(1) 概要

平成 25 年度春・秋学期においてそれぞれ最終授業にて実施した。対象科目はコア科目の全科目及びユニバーシティ・スタンダード（以下、US）科目（実験・実技科目を除く）であるが、コア科目については、学期により対象科目群を限定している。

春学期：コア科目 自然科学科目群及び総合科目群（但し、実験実習実技科目は除く）
US 科目（但し、実験実習実技科目、工学部開講の US 科目は除く）

秋学期：コア科目 言語表現科目群及び社会文化科目群（但し、実験実習実技科目は除く）
US 科目（但し、実験実習実技科目、工学部開講の US 科目は除く）

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝200 名／205 名（97.6%）

秋学期＝199 名／206 名（96.6%）

実施開講クラス数：春学期＝332 クラス／342 クラス（97.1%）

秋学期＝326 クラス／338 クラス（96.4%）

回答学生数：春学期＝10,812 名／12,650 名（85.5%）

秋学期＝10,534 名／12,593 名（83.6%）

(2) 実施時期

春学期：7 月 17 日（水）～7 月 23 日（火）

秋学期：1 月 16 日（木）～1 月 22 日（水）

※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

(3) 実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がアンケート用紙を配布、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

(4) 調査用紙（p.82 参照）

2. 集計結果及び公表（p.58～77 参照）

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

コア科目群（全体）、玉川教育・FYE 科目群「一年次セミナー101」、「一年次セミナー102」、言語表現科目群、言語表現科目群（英語）、言語表現科目群（英語以外の語学）、社会文化科目群、自然科学科目群、総合科目群

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者にのみフィードバックし、上記 9 分類についてはその平均値を学内のみを対象にホームページで公表している。

平成25年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 2315

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.3	4
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	14

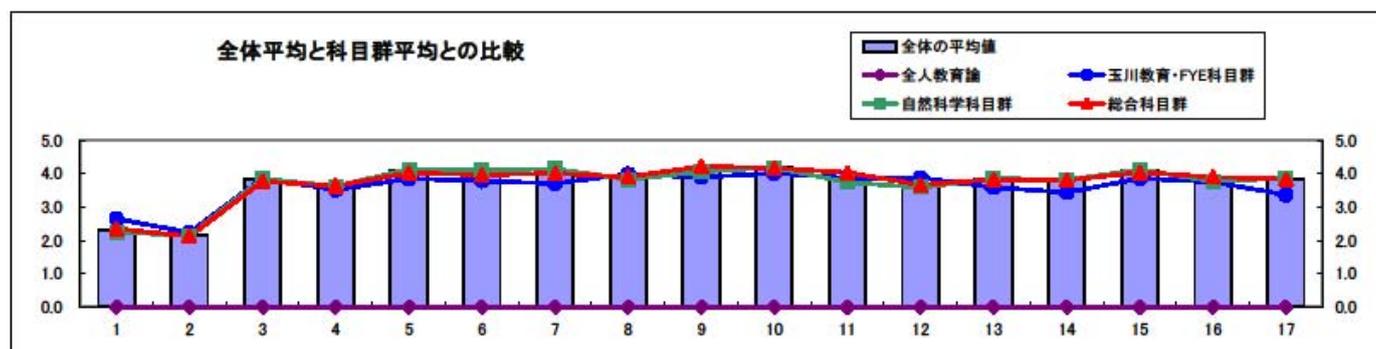
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.8	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	5

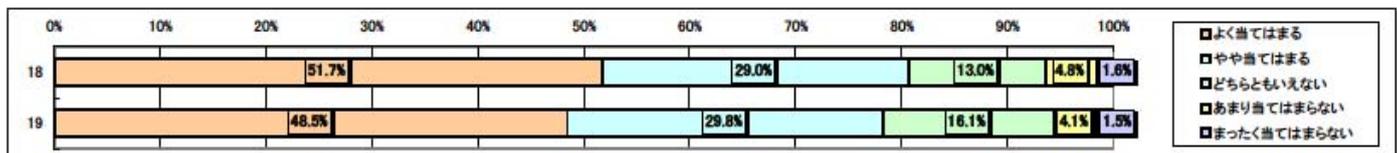
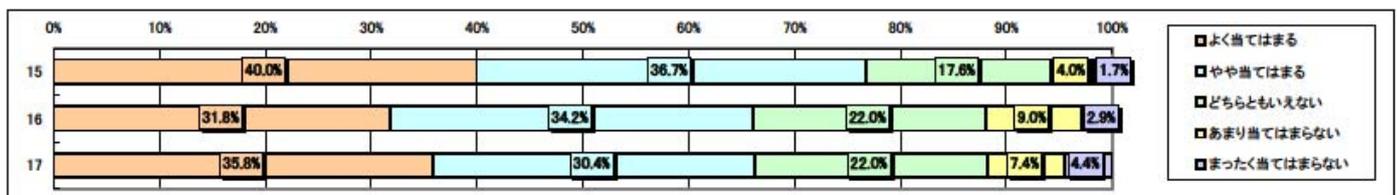
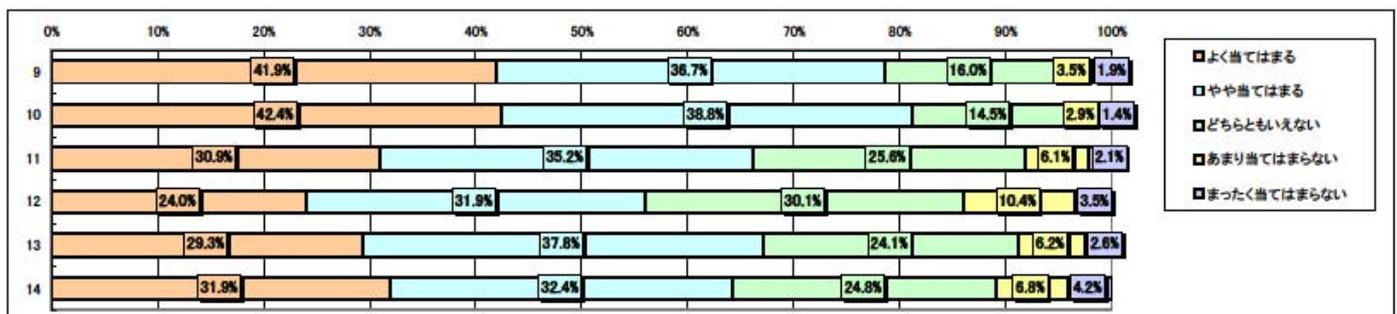
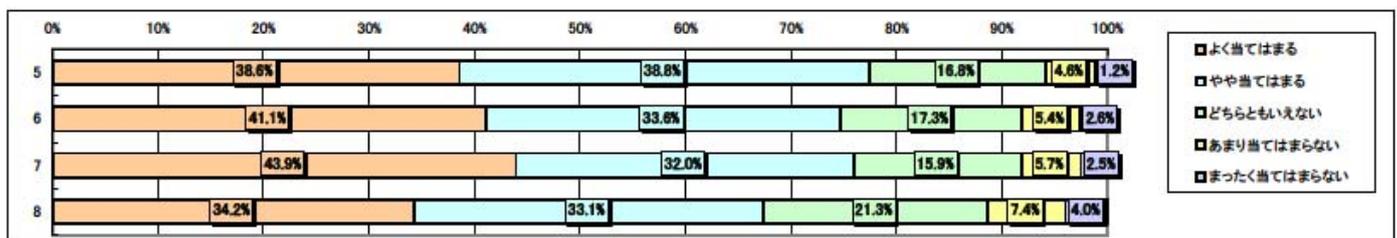
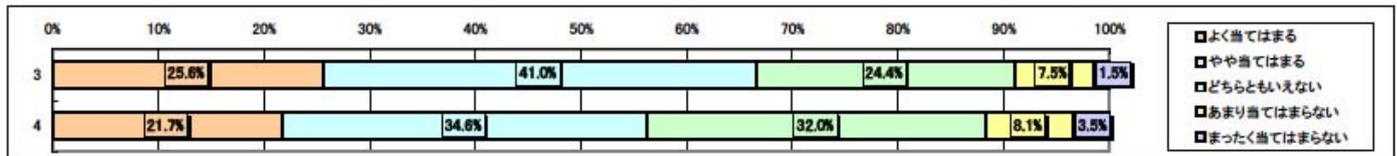
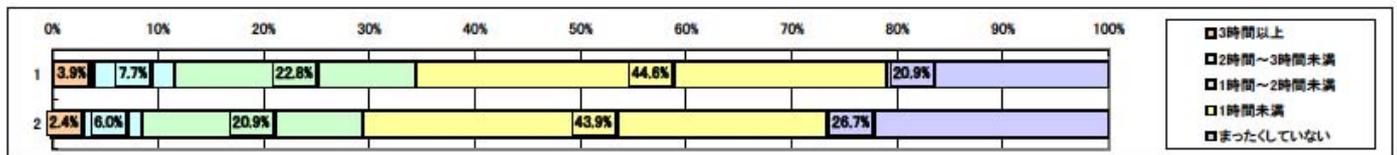
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	8
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	3
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	4

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	0
	10 基本的知識が得られた。	4.2	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	6

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	5

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	8
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	8





◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

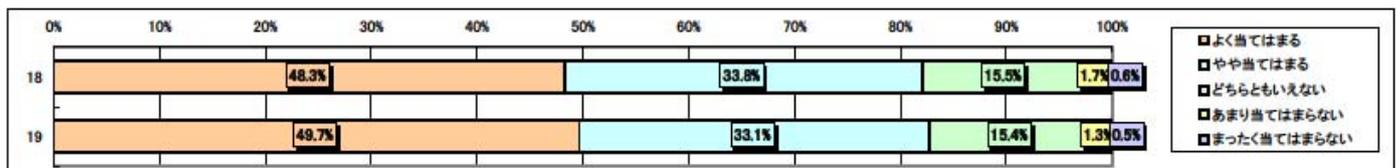
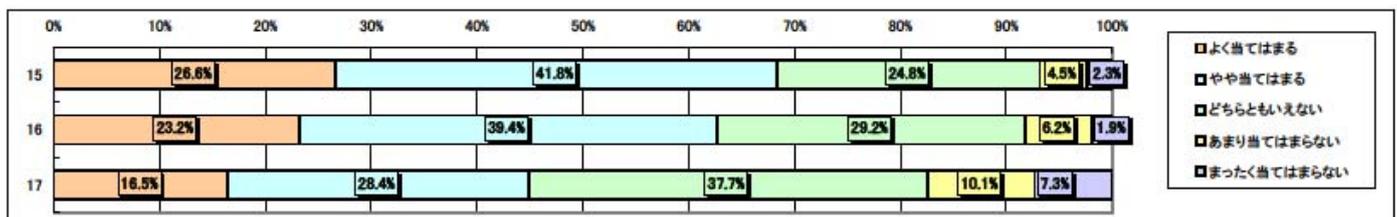
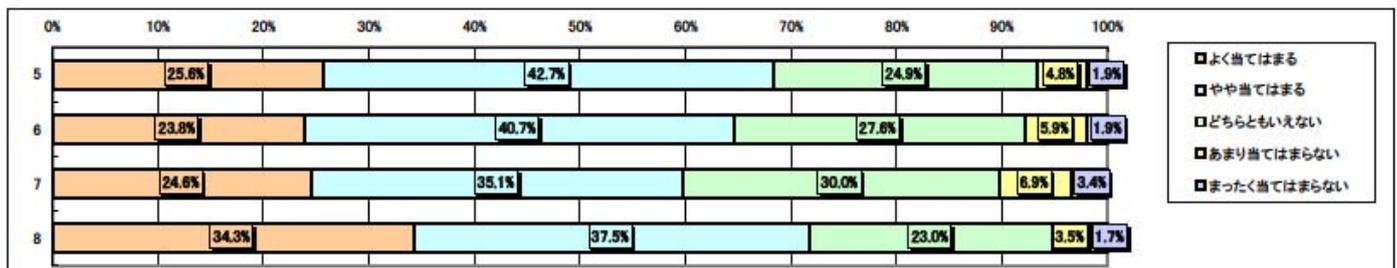
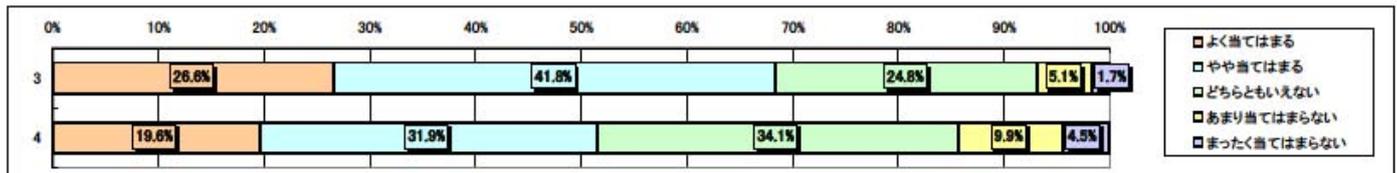
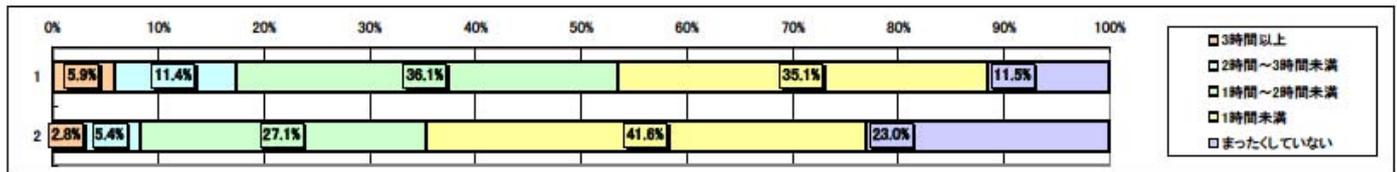
平成25年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次セミナー 101

回答数(全体): 1708

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.7	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	13
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	3
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	7
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.8	22
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.7	18
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	3
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	1
	10 基本的知識が得られた。	4.0	5
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	5
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	8
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.6	16
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.4	13
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	3
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	7
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.4	9
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	15
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	17



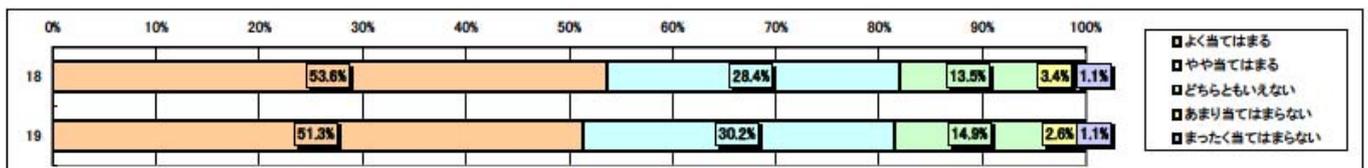
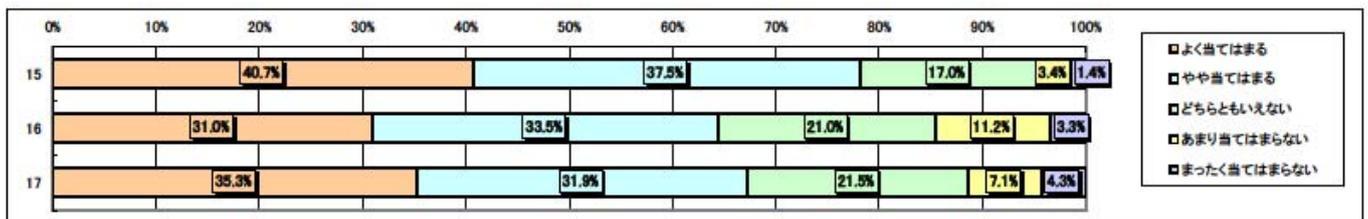
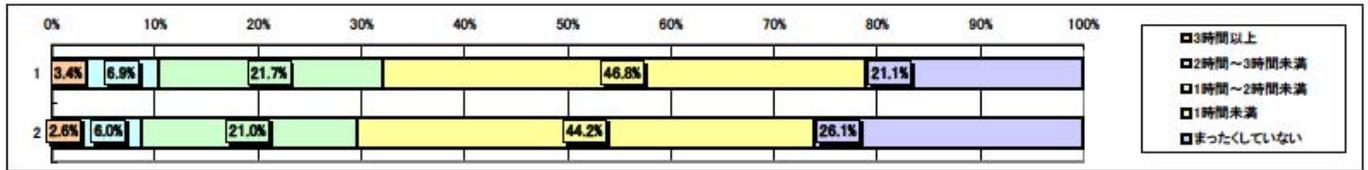
平成25年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 自然科学科目群

回答数(全体): 1318

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.2	1
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	9
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	3
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	6
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	0
	10 基本的知識が得られた。	4.2	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.7	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	5
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	4
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	6
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	6



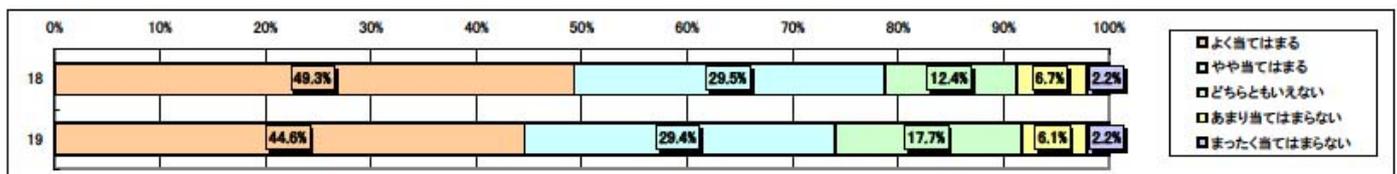
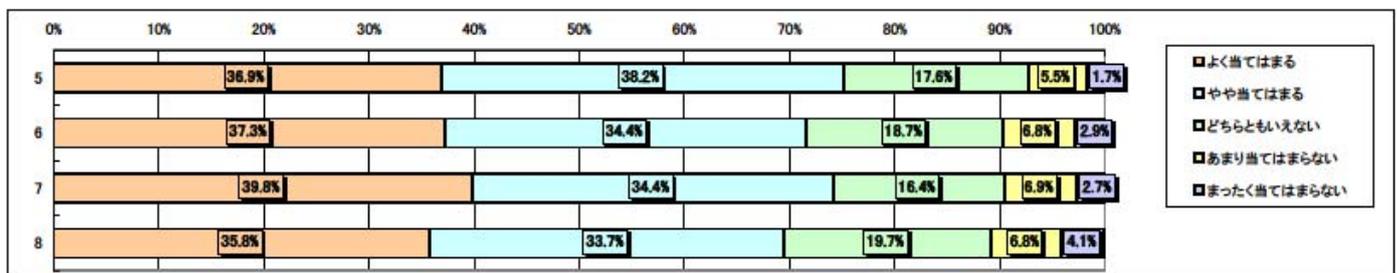
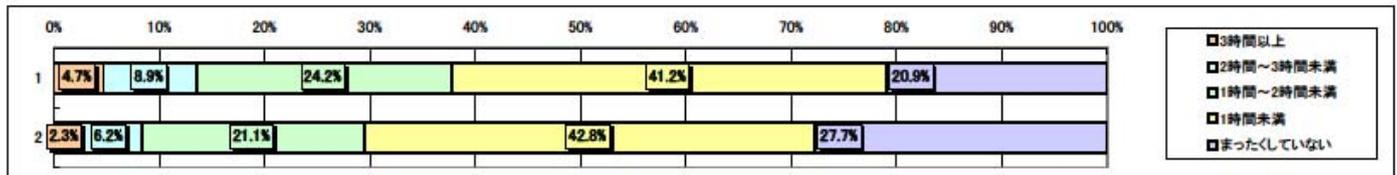
平成25年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 総合科目群

回答数(全体): 978

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.4	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	5
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.8	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	2
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	0
	10 基本的知識が得られた。	4.2	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	1
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	1
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	2
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	2



平成25年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 2056

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.3	7
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	20

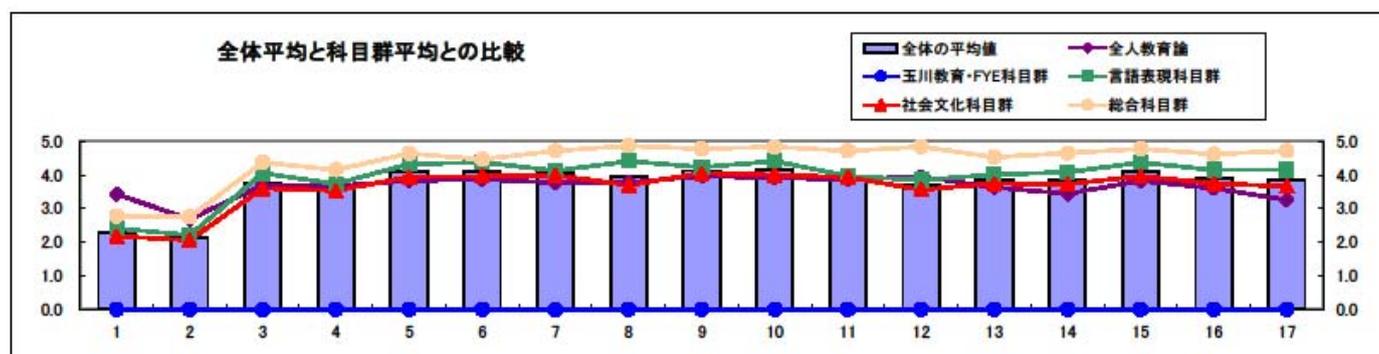
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.8	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	5

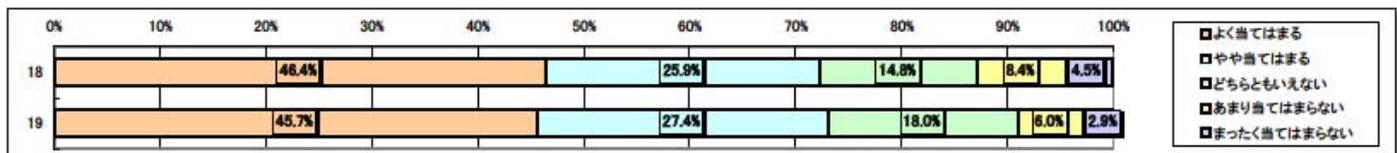
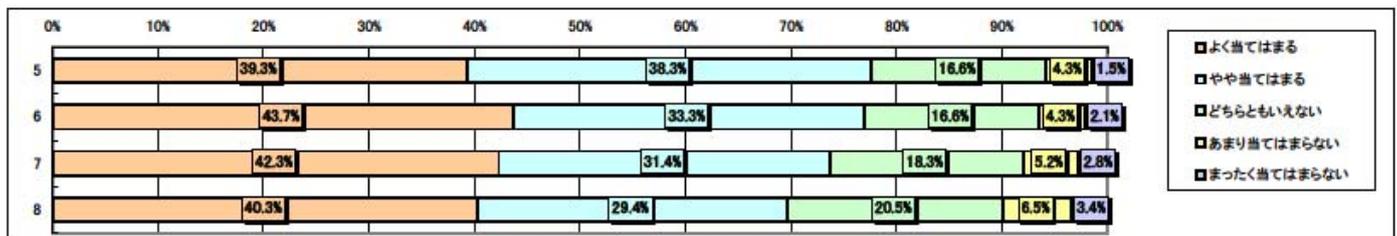
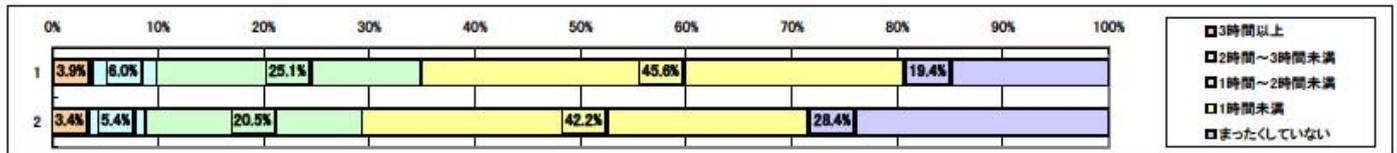
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	3
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	6
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	5

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	0
	10 基本的知識が得られた。	4.2	3
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	5
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	3

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	5

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	12
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	14





◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

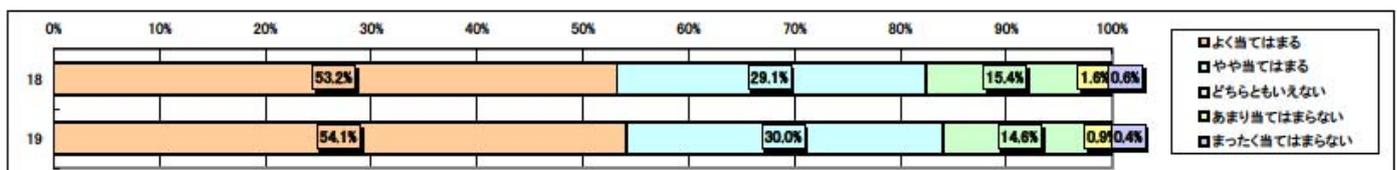
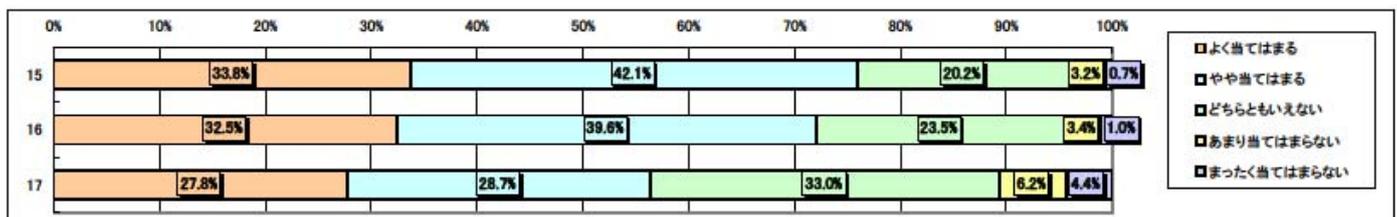
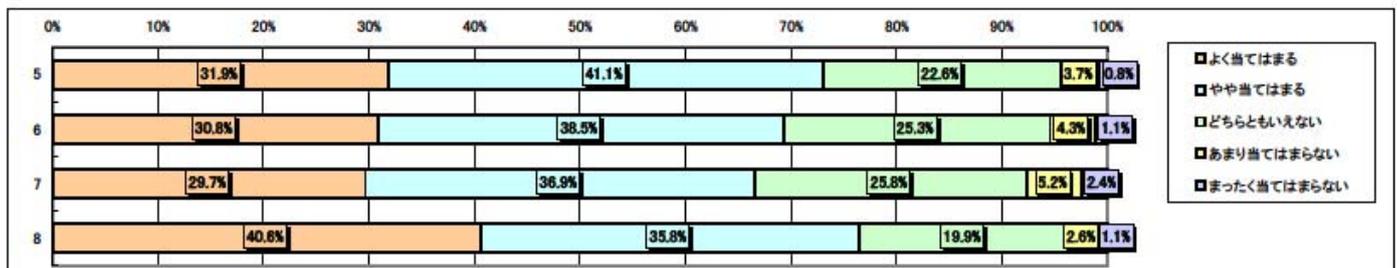
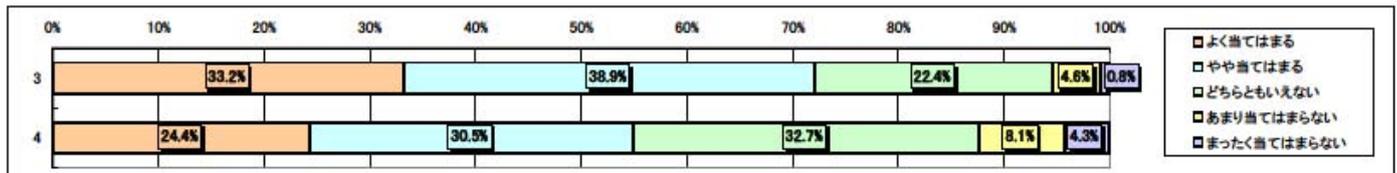
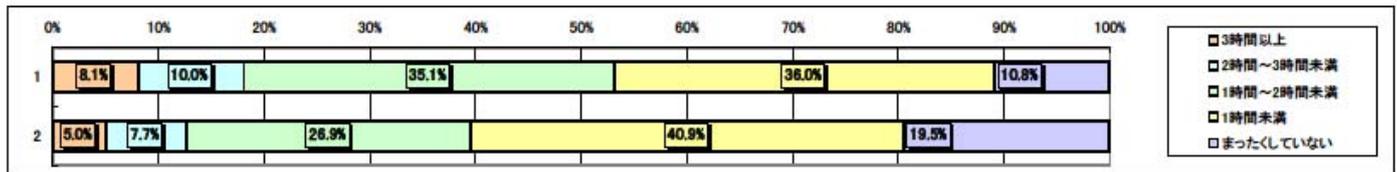
平成25年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次セミナー 102

回答数(全体): 1601

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.7	4
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.4	13
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.0	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	4
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.1	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.1	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	6
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.1	7
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	5
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.6	4
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	1
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	2
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.4	3



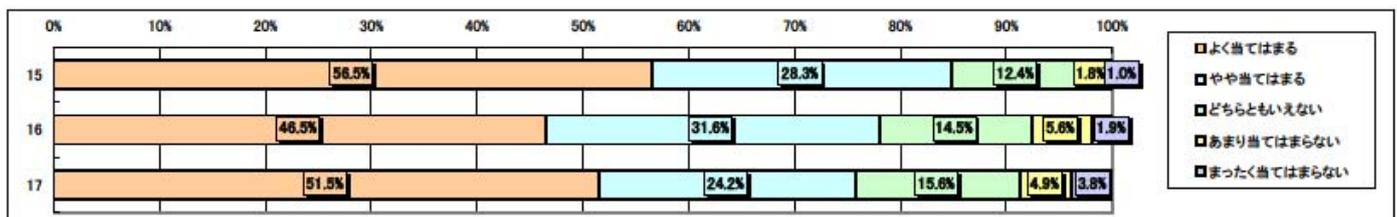
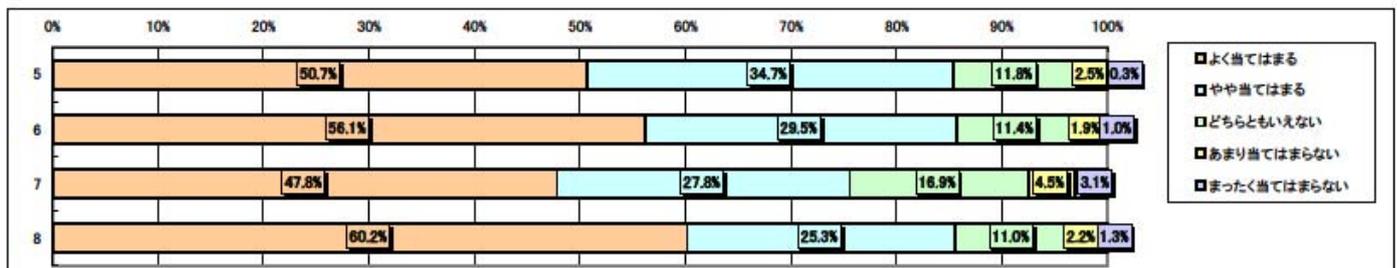
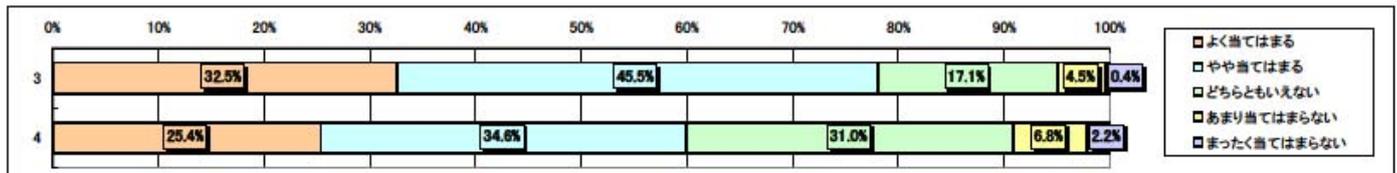
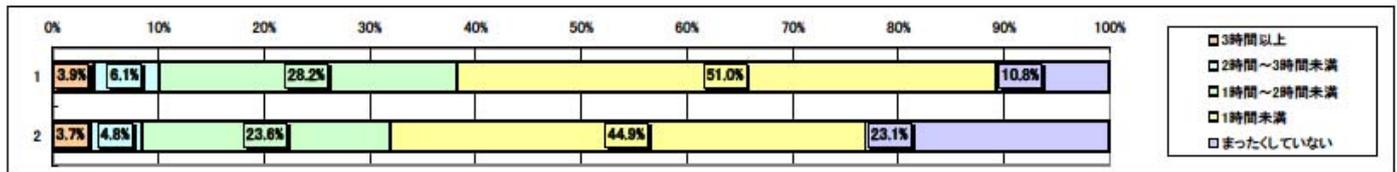
平成25年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 言語表現科目群

回答数(全体): 719

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.4	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	10
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.1	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.7	2
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.3	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.4	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.4	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	0
	10 基本的知識が得られた。	4.4	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	0
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.1	1
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.4	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.2	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	1
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	3
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.4	4



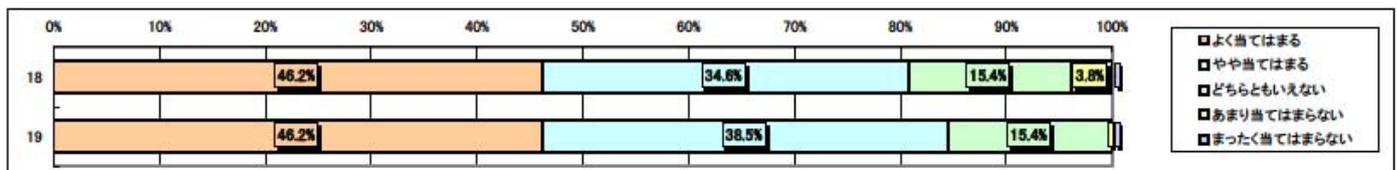
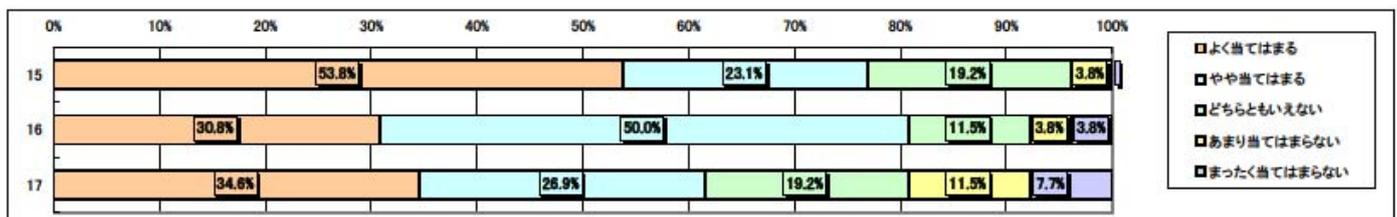
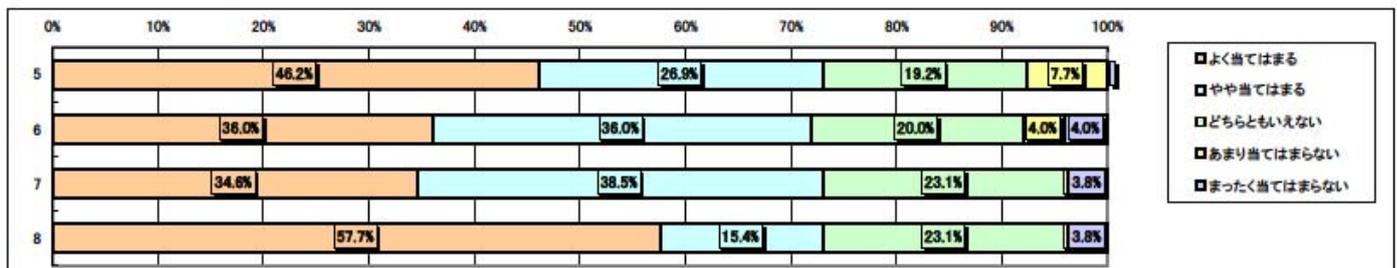
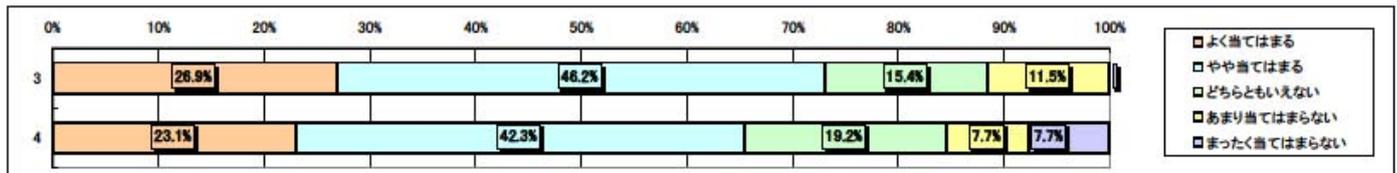
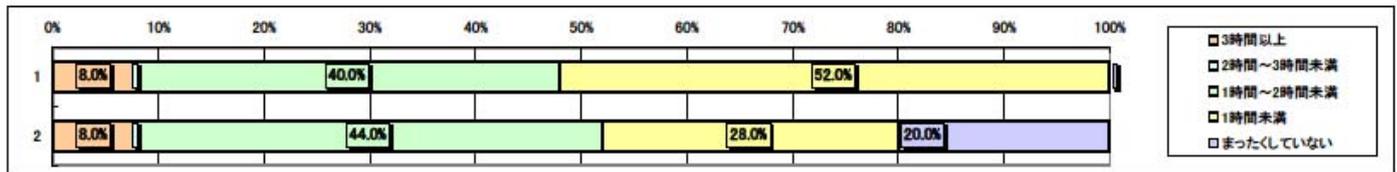
平成25年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

五川大学

コア科目 言語表現科目群 英語

回答数(全体): 26

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.6	1
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.5	1
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.7	0
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	0
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.2	0
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.8	0
	10 基本的知識が得られた。	4.1	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.1	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	0
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	0
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.3	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	0
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	0
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	0



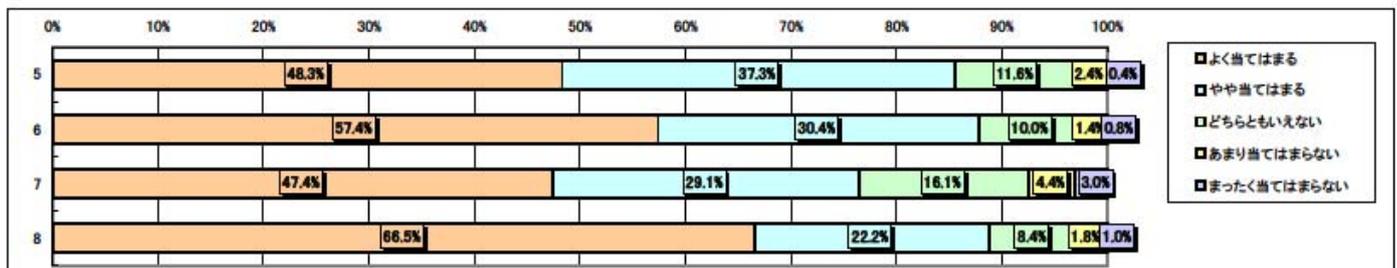
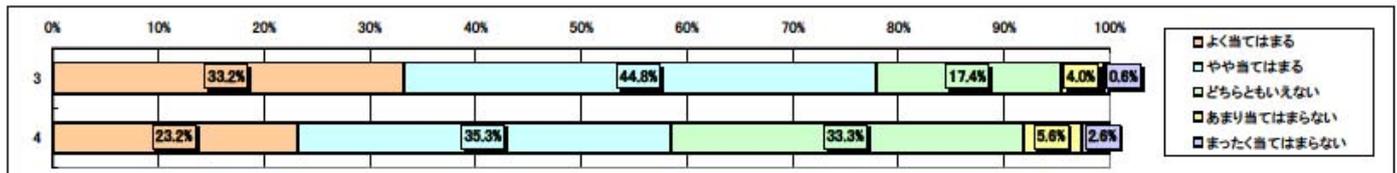
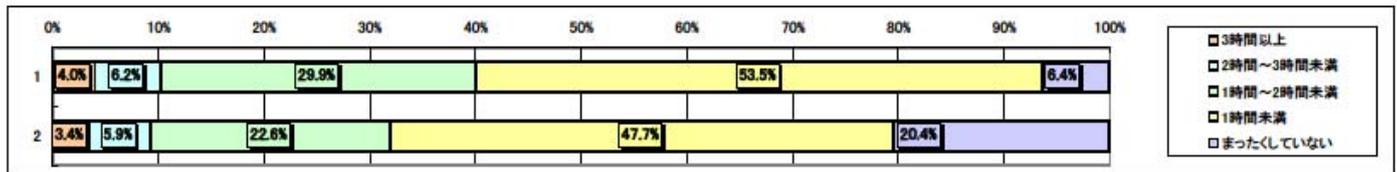
平成25年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語以外

回答数(全体): 500

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.5	1
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	5
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.1	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.7	1
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.3	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.4	0
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.5	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	0
	10 基本的知識が得られた。	4.4	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	0
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.1	1
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.4	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	1
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.4	1
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.4	1



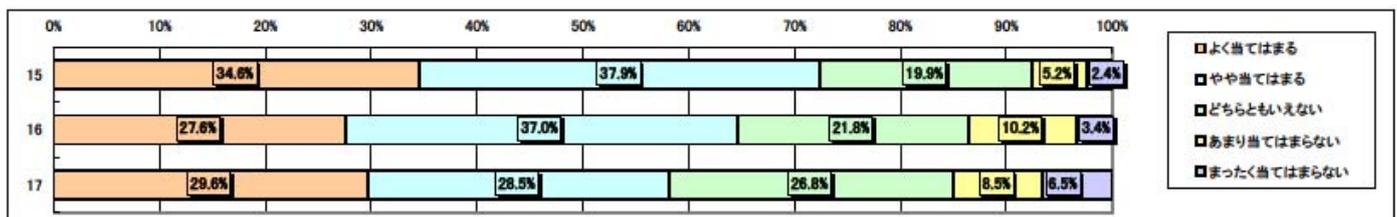
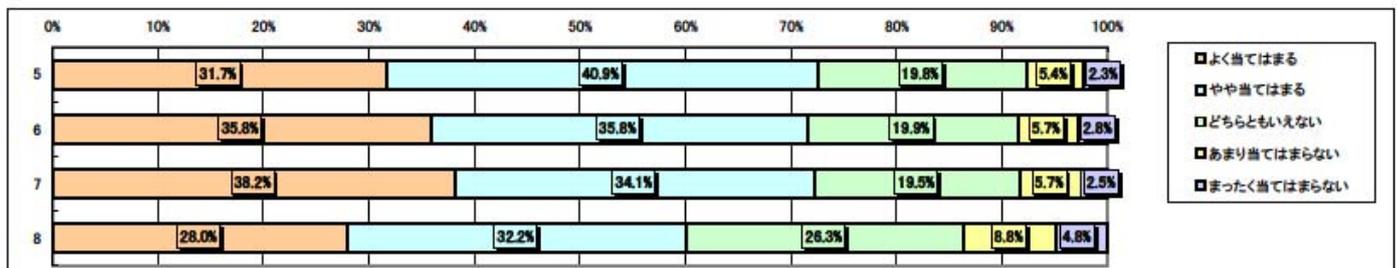
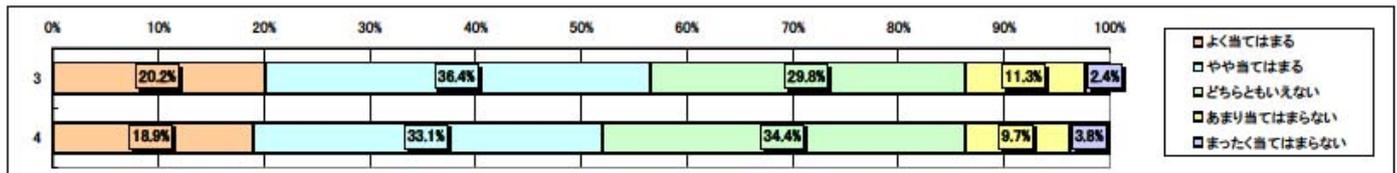
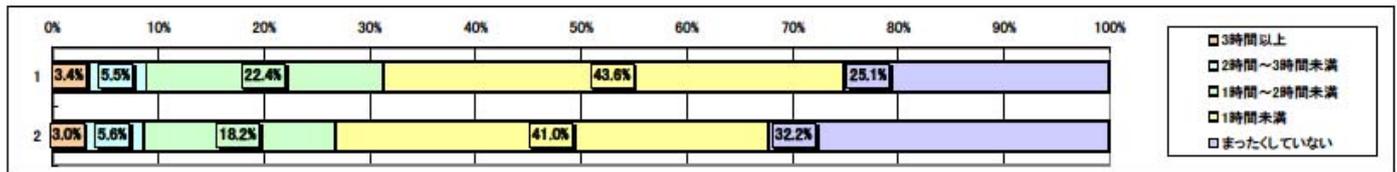
平成25年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 社会文化科目群

回答数(全体): 1276

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.2	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	9
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.6	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	3
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	4
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	0
	10 基本的知識が得られた。	4.0	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.7	2
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	4
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.8	9
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.9	10





参 考 资 料

参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学 FD 委員会

- 日時 : 平成 25 年 5 月 10 日 (火) 17:30~19:00
- 場所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議案 : (1) 平成 25 年度 会議日程に関する件
(2) 平成 25 年度 コア科目/US 科目 学生による授業評価アンケート 実施に関する件
(3) 平成 25 年度 FD 研修会等に関する件
- 報告 : (1) 他大学等提供のシンポジウム等および資料提供について
(2) 各学部 今年度 FD 活動計画および授業参観計画の提出について
(3) 「平成 24 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付方法について

第 2 回大学 FD 委員会

- 日時 : 平成 25 年 7 月 12 日 (金) 17:30~19:00
- 場所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議案 : (1) 障害をもった学生の対応に関する件
- 報告 : (1) 平成 25 年度 各学部の FD 活動計画について
(2) 平成 25 年度 各学部の授業参観計画について
(3) 本学 HP の「大学 FD 委員会」サイトのリニューアルについて

第 3 回大学 FD 委員会

- 日時 : 平成 25 年 11 月 22 日 (金) 17:30~19:00
- 場所 : 大学研究室棟 B101 会議室
- 報告 : (1) 大学 MMRC 棟 (仮称) の活用について
(2) 補講として行う e-learning について
(3) 平成 26 年度 新任教員研修会について
(4) 今後予定しているワークショップについて
(5) 共同研究発表会の実施について

第4回大学FD委員会

- 日時 : 平成26年1月17日(金) 17:30~19:00
場所 : 大学研究室棟 B101 会議室
議案 : (1) 授業のパラダイムシフトー反転授業の実施に関する件
(2) 「授業をとおして修得できる力」の見直しに関する件
(3) 大学 IR コンソーシアムの学生調査の実施について

第5回大学FD委員会

- 日時 : 平成26年3月20日(金) 15:00~16:00
場所 : 教学事務棟 150/151 会議室
報告 : (1) 今年度 各学部のFD活動について

参考資料 2. 「授業評価アンケート」用紙

記入日	月	日	回答者学年	①1年	②2年	③3年	④4年	⑤その他
-----	---	---	-------	-----	-----	-----	-----	------

授業科目名

開講時限	曜日	限
------	----	---

担当教員名

5	4	3	2	1
3時間以上	2時間<3時間未満	1時間<2時間未満	1時間未満	まったくしていない

I. この授業に対するあなたの学習時間について

	5	4	3	2	1
1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	5	4	3	2	1
2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	5	4	3	2	1

5	4	3	2	1
よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない

II. この授業に対するあなたの取り組みについて

	5	4	3	2	1
3 この授業に積極的に参加した。	5	4	3	2	1
4 シラバスは受講に役立った。	5	4	3	2	1

III. この授業の進め方について

	5	4	3	2	1
5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	5	4	3	2	1
6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	5	4	3	2	1

		5	4	3	2	1
		よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
IV. この授業を受けてみて						
9	新しい考え方・発想に触れた。	5	4	3	2	1
10	基本的知識が得られた。	5	4	3	2	1
11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	5	4	3	2	1
14	学問的興味をかきたてられた。	5	4	3	2	1

V. この授業を総合的に振り返って

15	授業全体の目標・内容が明確であった。	5	4	3	2	1
16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	5	4	3	2	1
17	この授業をほかの学生に薦めたい。	5	4	3	2	1

VI. その他

18	この授業の教室の大きさは適切であった。	5	4	3	2	1
19	この授業の受講者数は適切であった。	5	4	3	2	1

その他、意見、感想など自由に書いてください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

参考資料 3. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

第1条 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

第2条 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 4 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 5 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
- 6 前項による部会は、各学部ごとに設け、部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第3条 委員の任期は1か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第4条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第5条 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(部会)

第6条 各部会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第7条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

第10条 本委員会に係る事務主管は、学士課程教育センターとする。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

平成 26 年 5 月発行

発行 玉川大学 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8866 (学士課程教育センター)